
幽霊がいるかって？そりゃ...

拳骨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幽霊がいるかって？そりゃ…

【Nコード】

N4123C

【作者名】

拳骨

【あらすじ】

小さな小さな討論会が始まった。幽霊が居るかって？そりゃ…居ないだろうよ。

小さな討論会（前書き）

敢えてホラーに投稿してみました。
無条件で『霊』を信じている方は、是非一読ください。怪しい世界
へ踏み出す前に…

小さな討論会

俺の名前は『直樹』。

仲間内からは『直』と呼ばれている。

仲間って言っても、偏屈な俺に親しい仲間なんてのは数人しか居ないんだけどね。

その数少ない仲間が今夜もいらっしやるそうです。

とり合えず、明日の寝不足だけは確定だな…

7月。

猛暑と言われていたはずだが、梅雨が長引き涼しい日々が続いている。

三人はコンビニで買い込んだビールやつまみを持って、友人宅に車で向かっていた。

「なあ、徹、今日は直に何の話振るつもりなんだよ。」

質問した青年は名を『鉄也』といい、皆からは『鉄』と呼ばれている。知りたがりな性格で質問が多い割りに、自ら考える事には努力しない、楽天的と言うかお気楽なタイプ。高校を卒業後、自宅から遠くない小さな部品メーカーに就職。十年に満たないキャリアだが、今や会社に欠かせない設計者となっている。設計と言ってもデザイナーに近く、その方面の感性は持ち合わせていたようだ。しかし、センスだけで勝負している訳では無い様で、今では小さいながらも一つの部隊の責任者となっている。その意味でも決して馬鹿ではないのだが、自身の生活に直結しない事柄に対しては、やはり本気で物事を捉える事はしない。仲間内ではそのキャラゆえにムードメー

カーでもある。因みに無類の酒好き。

「お楽しみに…って事も無いけどさ。今日は古典的なネタで攻めるよ。」

徹は薄く笑みを浮かべ、ミラー越しに目をやり後部座席の鉄也に答えた。

「ふ〜ん…。咲も知らないの？」

矛先を変え、鉄也が問うた彼女は「美咲」。肩書きは徹の会社の同僚にして彼女。「美咲」の名から後ろを取って「咲」と呼ばれる事が多い。少なくとも徹を始めとして周囲の男共は皆「咲」と呼ぶ。

「知らなくい。今日は忙しくて。そう言えば話もしてないもんね？」

「そーだな。」

そっけなく答えて徹はウィンカーを出す。車は見慣れた駐車場に吸い込まれた。直樹の待つ、いや本人に待っている認識は全く無いが、彼らが来る事は承知している彼のアパートに着いた。

「さて行くか。」

徹の声に従い、残る二人も車から降りた。

玄関のチャイムに応じて扉を開けた直樹の前には、珍しくも何とも無い三人組が立っていた。

「よっ。」

サクッと挨拶を交わして三人は部屋に上がり込む。一番最後に入った鉄也は慣れた手付きで玄関の鍵をガチャリと閉めた。恐らく今夜、これ以上の訪問者は絶対に居ないと鉄也は確信している。直樹にそんな相手は居ないはずだから。

直樹と男性客二名は思い思いの場所、と言っても positioning となりつつある場所に各々腰を下ろす。美咲はまるで我が家のキッチンにでも

向かうように、この部屋のその場所へ…。直樹がこのアパートで一人暮らしを始めて今年で四年。何度も繰り返されてきたこの四人の動きはもう馴染みの光景。

直樹がタバコに火を点けながら最初の言葉を発する。

「お前ら、ホントに暇だな…」

苦笑いの鉄也がこれに答える。

「お前に言われたかないね。大体暇で寂しい思いをしてんだろって、こつこつ来てやってる俺等の友情に感謝して欲しいよ。」

「だよね〜。ところでさあ、冷蔵庫ん中またビールしか入ってないじゃん。直、ゴハンちゃんと食べてんの？」

キッチンで酒やらつまりやらの準備を終えて、それらを運びながら美咲が引き継いだ。

「はいはい。皆さんで色々と俺様の心配してくれてるって訳ね。」
肩を落とす素振りを見せながら直樹が答えた。視線の先の徹が、やや苦い笑みを浮かべている。恐らく美咲のお節介発言に対してだろう。だが人付き合いが面倒でならない直樹にとって、この友人二人とその連れ一人は、何の気兼ねも無く接する事の出来る数少ない存在である。絶対に口には出さないが、実は彼らの訪問を心待ちにしているのもまた確かであった。呑み過ぎと寝不足、それにお隣さんの冷たい視線を除けばであるが…

「カンパ〜イ！」

の掛け声の後、一通り挨拶代わりの近況報告を交わしつつ、賑やかに談笑が続いた。

徹と美咲はある薬品メーカーの研究所に勤務している。二人はそこで知り合い現在の関係になった。徹は所謂研究者である。研究者と

言えば聞こえも良いが、残念ながら徹の最終学歴は……。大学も出ていない彼に与えられるのは、真の研究者達の助手であり、指示に従い、実験を繰り返しているに過ぎない。時にはナイスなアイデアが閃き活躍する事もあるのだが、結局お手柄は、それを更に発展させてしまう上役の秀才達に攫われる。実に浮かばれない話だがこれが社会の現実でもある。もともと、有名大学出の上役達にはどう頑張っても勝てない現実、残念ながらそこにある。

美咲はというと、こちらも徹と同じ研究室に籍を置くものの、本人は白衣に全く縁が無い。単なるアシスタントであり、仕事は事務処理が中心。徹が居るから今も働いているが、出来るなら早いところ寿退社したいと望んでいる。あの堅物共を結婚式に呼ばなくてはいけないのかと、飛躍した悩みを抱えつつ……。

「しっかしなあ……。鉄は設計屋で直は技術屋か。羨ましいなあ……」

あゝ始まった、と直樹は思う。

直樹は『ある有名な樹脂』専門の成型メーカー勤務であり、そこで技術屋をやっている。『ある樹脂』は有名だが会社はベンチャーに近く無名で小さなものだ。営業部門から持ち込まれる「こんな物が出来ないか」という話を形にするのが直樹の仕事である、これに必要な事なら素材の調合や製造方法の検討、試作品の評価から製品の立ち上げまで何でも引き受ける。毎日の様に違うテーマと戦う事になり、また無理難題も多くて大変ではあるが、それが直樹には向いていた。事実、直樹は今の仕事内容や自身の立場にそれなりに満足しており、このアパートを借りたのも会社の近くに住む事が第一の理由だったりする。

野郎三人の内、最も給与の面で恵まれているのは他ならぬ徹だ。直樹や鉄也は社内の良いポジションについてはいるが、詰まる所会社の規模が徹のそれとは違い過ぎる。だが男の心理とは、いやプライ

ドとはそう単純ではない。収入は現実的に多いほど良いが、しかしそれが全てでは無いものだ。徹にとっては自分で物事を考え組み立てて、それが成果、結果となって帰ってくる直樹や鉄也の仕事が羨ましくてたまらないらしい。

「俺なんか試験管と睨めっこしてるだけだもんなあ……」

徹がまた呟いた。

いい嘆きを入れ始めた徹だが、これは一定量の酒が入り、同時に徹の討論開始スイッチが入ったサインでもある。いつものパターンだから皆承知している。

鉄也がそんな事はない、一流会社の研究所勤務で高収入なら文句は無いだろう云々と、鉄也にとっては至って本気、別に慰めても何でも無い言葉を掛けても、徹は俯いたまま反応を示さなかった。これもいつもの通りだ。

徹としては、三人の内で最も成績が良く、優先的に大企業に就職出来たはずの自分が、何年経っても助手であるのに対し、当初収入面で徹を羨んでいた二人が今や会社で大活躍しているという現実が苦しかったのだ。二人に敵意は無いが、慰めて貰うのは流石に不愉快だ。何よりそれが分かっているながら愚痴ってしまう自分にも腹が立つ。

だから愚痴の後は必ず自分で話題を変える。それゆえに徹の愚痴は話題変更のサインになるのだ。

しばし無言の時間が流れ、徹は思い出したかの様に口を開く。

「なあ……」

来た！と直樹は心の中で身構えた。

「ああ？」

と答えて続きを促す。

「幽霊つて、いるか？」

どうやら徹は、今夜のスタートボタンを押した様だ。

「い、今何と？」

直は素つ頓狂な声で聞き直した。

「だからさ、幽霊はホントにいるのか。つまり信じるかどうか…いや違うな。肯定でも否定でもどっちでも良いけど、その根拠があるかって事だな。」

徹の説明に三人とも軽く固まった。

その話タブーなんじゃ…と、徹以外の三人は同じ事を思う。

直樹と鉄也、徹と美咲の四人は、この部屋に頻繁に集合している。

直樹は人付き合いは嫌いだ、喋るのが苦手とか、対人恐怖症や赤面症とかそんな理由は何も無い。単に面倒だから、友人知人の輪を広げたくないと思っただけだ。だからこの四人でいる時は普通に話すし、男としてはむしろお喋りな方だ。同じように徹も良く喋る。というより、直樹と徹の二人はとにかく議論・討論が好きなのだ。意見をぶつけ合うのが好きなのである。

鉄也はそんな二人の、ややマニアックであつたりもする話を聞くのが好きであり、時折参加すればそれも楽しかった。質問すれば大抵は答えが得られるし、何より酒の肴にこの環境は素晴らしいと感じている。

美咲は徹の彼女として、彼と一緒にいたいという漠然とした理由もあるが、時にやりあい、時に笑いあうこの三人の世話を焼くのが好きだった。小難しい話は苦手という女性も多い中、彼女は彼らの、

自分にとってはややレベルの高い話に耳を傾けるのも嫌いではなかった。勿論、分かる話題なら参加もする。

そんな四人だからこれまで色々な話題で盛り上ってきた。芸能、スポーツや時事ネタも多いが、政治経済は勿論の事、進化論だったり宇宙論だったり、量子力学なんてのもあった。流石に量子力学は直樹と徹の二人の会話に近かったが。

だがこの四人の小さな討論会には、一つのタブーが存在した。それが幽霊や魂などといった、カテゴリーで言えば『心霊』である。オカルトの中でもUFOや超能力はOKだし、宗教論も構わないのだが、心霊に限っては御法度だった。

それには理由がある。

徹の父方の実家は由緒正しいお寺だという事実…これだ。徹の叔父が現在の住職であり、同年代の従兄弟も居たので徹は子供の頃、よく寺で過ごしていた。従兄弟共々住職から色々な話を聞き、当然の様に仏教に精通している。徹も、徹の父親も仏門に入ることは無かったし、これからもその必要は無いのだろうが、祖父、叔父は勿論、先祖代々が住職である家柄に生れた者にとって、人に魂が宿るのは当たり前であり、ここだけは絶対に譲れないはず…なのである。

「ああ、分かってるよ。これだけ色々と話してきたのに、お前らが一切幽霊だの魂だのをテーマに挙げなかったのは、俺の家系に気を遣って、だろ。」

いや、そうではないと直樹は思う。心霊ネタをテーマにしなかったのは、徹がそれを挙げる事が無かったからだ。三咲と知り合うずっと前から三人で色々な話をしてきたが、今まで心霊について語られた事は一度も無かった。メディアから流れて来た体験談などが紹介されたりはしたが、

「へえ…」

「すげえな…」

「怖え…」

「鳥肌たつたよ！」

程度の反応に止まり、それ以上に発展することは無かったし、その真否を追求したり、根底を探る様な議論はしてこなかった。正しく言えば、それを避けて来た。

「ああ、そうか。俺がその手の話を避けていると思ってたんだろ。」

その通りだと三人は首肯する。

「良いんだよ、別に避けてた訳じゃないんだ。確かに俺の家は仏教に通じるし、逆にその事で、みんなが言いたい事も言えないだろうと思って、話題に挙げるのを遠慮してたところはあるけどね。でも、どうしてもこの件で一度、みんなと話してみたかったんだよ。」

三人を順に見据えながら話す徹の言葉に、どうやら嘘は無い。無理している様子も無いし、恐らくは本音なのだろうと直樹は思う。なぜ今なのか、その単純な疑問は残ったが。

「良いのかよ。仏教にとっちゃ、許し難い方向に話が行くかもしんねーぞ。」

言う鉄也に徹が頷き、

「それは良いよ。それよりさあ鉄、な、古典的なネタだろ？」

と言い笑う。

「なるほど、確かに古典的なネタだな。」

と同じく笑顔で鉄也が答えた。

直樹はその二人のやり取りを見ながら考えていた。

（これは不味い。寝不足どころじゃない。長くなる…朝になるかも…）

恐らくこの思いは的中することだろう。それでもテーマの決まった

今宵の討論会に、僅かではあるが期待も膨らみ始めて来た直樹であった。

「私ね、少し靈感があるのよ…」

突然の美咲の告白に、三人が一斉に彼女に注目した。

その顔三つは一樣に『驚き仮面』。

「ちよつ、な、何よみんなその顔！」

予想外の注目度に少しうろたえた美咲だが、気を取り直して彼女は続けた。

「いや靈感って言っても、そんな大袈裟なもんじゃないのよ…。見えるとか聞こえるとかじゃなくて、何か感じるのよ、そう…何と言うかこう、嫌な感じとか、気配みたいなもの…」

直樹は内心ホッと胸を撫で下ろした。その程度なら良いだろう、と意見をぶつけ合い、相手を論破する事に躊躇いの無い直樹ではあるが、この場合は相手自身を否定し兼ねない問題だ。友人の恋人であり、良く見知った女性を責めるようなことはしたくなかった。

「ホントにやるのか、その話。」

直樹はようやく口を開いた。その問いに徹は力強く頷いた。他の二人にも異論は無い様だ。

「じゃ、今日はこれで決まりだな。」

鉄也が言い、本日の討論会が始まった…

小さな討論会スタート！（前書き）

いよいよ本格的に討論スタートです。
でも、直樹の独演会の様相に…

小さな討論会スタート！

著者：読者の皆さん、初めまして。著者の拳骨です。ここからは、彼ら四人のやり取りを中心にお送りします。チャット風(?)でお楽しみ頂こうかと…

徹：

それじゃ先ず、各自の立場をハッキリさせとこう。あ、その前にだ。幽霊とか魂とか、そもそも同じ意味で扱って良いかどうかも定かじやない。そこは追々って事で今は触れない事にする。『霊』と言ったら、これらの総称って事で良いな？

頷く三人。

徹：

じゃあ改めて。鉄、お前は霊を信じるか？

鉄：

げ、俺からかよ。いや、信じるって言うか、正直言うと全然分かんねえ…。

でも存在して欲しいっていう希望というか、願望はあるな。

徹：

ん、じゃあ、中立だけど肯定寄りって事で良いか？

鉄：

ああそれで良い。でも基本は肯定寄りって事で。

徹：

分かった。で、咲はどう？靈感あるなんて俺も聞いてなかったけど…。

ま、それなら否定する訳ないな。

咲：

そうね。私は子供の頃から『ある』と思ってたし…うん、ある方で。

徹：

ん、分かった。じゃあ肯定派ね。

で、最後に直、聞くまでも無いけど信じないよな？

徹はこの上ない笑顔だ。

直：

その言い方は気に入らんなあ…。俺ってそんなに頑固で偏屈なイメ
ージな訳？

でもまあ、幽霊が居るかって聞かれたら、そりゃ居ないだろうよ。

流石に三対一じゃ分が悪いけど、全員肯定じゃ、議論になんねーし
な。

ま、俺は完全否定だね。

徹：

ん？三対一って、俺はまだ何も言ってるねーぞ。

鉄：

オイオイ！そりゃねーだろ。

徹：

ははは、冗談だよ。俺が否定したんじゃ始まらないだろ？俺は信じ
るよ、当然だ。

直：

やっぱり三対一な訳ね。さあてどう戦おうか？

徹：

まあ、そんな構えんなくて。そんじゃ本題に入るぞ。まずは問題提
起が必要だけど、誰か、何か意見はあるか？

直：

意見じゃないけど、頼みがある。

徹：

なんだ？

直：

一つ一つの事象について議論してたらキリが無いだろ？それに例え
ば『俺が見たアレが霊でないなら何なんだ？』と聞かれても俺には
何の回答も無いし説明は出来ない。だから、出来るだけ大きく捉え
て議論したい。それが俺の希望だよ。

徹：

確かにな。よし、そうしよう。二人も良いな？

咲：

うん、分かった。出来るだけそうする。

鉄：

了解。でも俺バカだから、そうなっちまったら言ってくれ。

徹：

よし。じゃこれで良いな、始めよう。

…無言の数十秒…

徹：

つて、無言かよ？

咲：

何かアバウト過ぎて何も言えない…

鉄：

咲と同じだな。で、どーすんだ？この空気…

徹：

あー、分かったよ。だめだなこりゃ…。

なあ直、俺が質問する形で始めるけど良いか？

直：

ああ、その方が助かるな。今の時点で俺から言う事ってやっぱ特に

無いし。

徹：

OKでは質問します。まずは直の思考の変遷、それが聞きたい。お前、ガキの頃から信じてなかったのか？

直：

いや。流石にガキの頃は信じてたよ。実に単純だったしな。そうだよ、中学ん時の修学旅行だっけか？みんなで怖い話で盛り上がりたりしたじゃん。

鉄：

ああ、そんな事あったよなあ。部屋真つ暗にして話し込んでな。俺がいきなり写真撮ったらフラッシュでみんな驚いてさ、その後酷い目にあつたよ…

徹：

あの時お前ボコボコにされてたな。

鉄：

でも面白かった。

徹：

じゃあ、いつから信じなくなつたんだ？それに何で？

直：

うん、大人になりながら徐々に、かな。何でかって言われるとちよっと困るけど、多分テレビとか見てて、なんか嘘くせえと思い始めたのが切欠だろうな。

徹：

へえ…。なんか意外に普通だな。

咲：

うん。でも確かに嘘っぽい番組って多いよね。私が見ててもこれって嘘だなんて思うことあるもん。

直：

だろ。印象に残ってるのがあってさ。霊能者とリポーターが自殺の名所に行く訳よ。それで霊視が始まって、一人の自殺者とコンタク

ト出来たと言い出す。その人は事業に失敗しての自殺だそうで、中学生になる娘が心配で…とか、謝りたい…とか色々言ってるって。

咲：

それで？

直：

リポーターが名前を聞いたら『K』さんです。…ってアホか？

咲：

匿名って事じゃないの？

直：

違う違う、『K』のインシヤルが浮かぶけどそれ以上は分からない。本人もなぜか答ええないって。

咲：

へへ。

直：

しかもその後、霊視で浮かんだ風景を元に地図書いて、その自殺者の家を探しに行った。

鉄：

見つかった？

直：

んな訳無いじゃん。

徹：

何だそりゃ。

直：

良く見てるとそんなの多いじゃん。

鉄：

確かになあ。色々見たけど、その手の話で本人が特定されたケースは見たこと無いな。

直：

だろ？そんなの繰り返し見てたら、信じられなくもなるよ、普通。
徹：

でも、そんな事で全否定って訳でもないだろ？

直：

そりゃね。

咲：

他にもあるの？

直：

いやいや、徹が『思考の変遷』て言うから、切欠の話をしたんだよ、一々挙げたらキリが無くなる。それに…こんなのは理由にならないだろ？

咲：

じゃあ理由を話してよ。

直：

理由なあ…。ちょっと違うかも知れねーけど、俺の考え話していい？

徹：

どうぞ。

直：

サンキュ。

いやね、今のテレビの話もそうだけど、霊云々の情報とか説明とかつて、無理があり過ぎるし矛盾だらけなんだよ。例えば…そう例えばね、霊には色々な能力がある事になってるだろ？

咲：

能力って？

直：

だから、生きてる人に姿を見せたり、声を聞かせたり。物を動かしたりとか、不思議現象色々。

咲：

ああ、そういう事ね。

直：

うん。でもその力が本当にあるなら、未解決の殺人事件とか有っちゃいけないだろ。逆に時効寸前で犯人が捕まるのもおかしいし、ま

あ、そんな感じの矛盾がたつぷりあると思うわけ。

咲：

でもお…

直：

でも、そんな事が否定の根拠にはならないよ。

咲：

そうなんだ…

直：

で考えた訳、もっと色々。

霊が存在する場合としない場合はどちらが自然か。存在しないなら何故こんなに人々に浸透しているのか。存在しているとして、何故今でも証明できないのか…とかね。

徹：

で、出た結論が否定って事か。

直：

そういう事。どう考えても居るとは思えない、と結論付けた。

徹：

なるほどね。じゃ、その話聞こうよ。な、咲。

咲：

うん。聞きたい。

直：

じゃ、俺が話せばいい訳ね？

徹：

ああ。

直：

話、遠回りするけどいい？

徹：

ああ、いいよ。

直：

質問もしたいんだけどいい？

鉄：
いいよ。何でも聞いてちょうだい。

直：
OK、そんなじゃ聞きます。いきなりだけど、みんなは神様を信じるか？

徹：
神様あ？

直：
ああ。宗教絡みでなくていいよ。全知全能の神でも、山の神でも海の神でもいい。要するに、人とか人の魂を越えた存在としての神様って意味で。

鉄：
いや信じないな。

咲：
私も。

徹：
仏教は無視するにしても、俺も神と言われるとな…

直：
うん…。じゃあ、妖怪は？

徹：
はあ？妖怪って、妖怪？

直：
まんま妖怪だよ。カップでも雪女でも何でもいい。ゲゲゲの世界だよ。

徹：
そりゃ、居ないだらあよ。

咲：
吸血鬼ってちょっと魅力感じるけど、カッコいいんでしょ？でも居るかって言われたらNOよね。あ、吸血鬼って妖怪？

鉄：

さあ…。でも、どの道居る訳ねーな。

直：

じゃあ、イエスは居たか？モーセは、ムハンマドは、お釈迦様は実在したと思うか？

徹：

そりゃ居たる。

咲：

そう思う。

鉄：

居た…かな。なあ直、何でこんな事聞くんだけ？

直：

ああ、済まん。でも分かったよ。みんな俺と同じ考えだ。

徹：

同じ考え？

直：

ああ。最後の偉人達はまるで話が別として、みんな神様や妖怪変化は否定する訳だろ？勿論、魔女なんてのも信じないよな。

咲：

うん…。で？

直：

つまりさ、人類は時代背景とか、その時の都合に応じて、神様とか妖怪とか、悪く言えば人外存在を、勝手に創造したり破棄したり、受け入れたり放棄したりを繰り返して来た事になるとは思わない？

咲：

そうなるの？

徹：

まあそうだな。だから神話や伝承は今でもあるし、過去に教会主導の時代もあれば、魔女狩りが実際に行われた歴史もある…だろ？

直：

その通り。

徹：

つまり、霊や魂はまだ放棄されていないだけ……ってか？

直：

正解。その通りだよ。

徹：

まあ、分からない話じゃないな。

咲：

でも神様とカツパが同列？それに霊とは違うでしょうに……

徹：

直にとっては同じだよ。な？

要するに偶像崇拝の否定って事さ。それが直の宗教論に繋がるんだ

ろ？

直：

ああ。流石は徹。

咲：

何で？

徹：

俺に聞くなつて。直、続き頼む。

直：

ああ。宗教はさ、古代の百科事典なんだと思うんだよ。それに道德の教科書かな。

咲：

へ？

直：

へって……。想像してみると分かるよ。古代人だって人間だ、それに人類はその頃から全然進化なんてしてない。だから……

咲：

だから？

直：

古代人も馬鹿でのろまって訳じゃなかったって事。大昔に科学なん

か無かったから、単に何も知らなかっただけって事さ。

咲：

ええ、分かんないよ。だから何なの？

直：

古代人にも色々な奴がいたのさ、鉄みたいなお気楽な奴も、徹みたいに賢い奴もな。

鉄：

オ、オイ！

直：

ふふ。冗談はともかく、人には知識欲があるだろ？知らない事、分からない事を、知りたい、理解したいと思う訳で、それは古代人も現代人も同じはずなんだよ。

咲：

で？

直：

神様が生まれた。

咲：

何それ。

直：

俺に言わせりゃ神様は便利屋だよ、便利神だな。

咲：

ねえねえ、直ちゃん。いい加減、私に分かるように話してくれない？

鉄：

プツ。

咲：

鉄、プツって何よ！

徹：

まあまあ。直、大体言いたい事分かるけど、咲の言う通りに頼むよ。

直：

ああ。やっぱり少し回りくどい話になるけど勘弁な。

徹：

それでいい。

直：

言葉、つまり言語は世界に何種類も存在するだろ？これは人類がアフリカから移住し始めるよりずっと後になってから、それぞれに言葉が発達したって証拠だろ？

咲：

人ってアフリカ出身なの？

徹：

咲、その話は後でな。進まないから。

咲：

あ、はい。すみません。

直：

続けるよ。

それなのに、言葉も通じず、文化交流もなかったと思える、辺境地の少数民族にも神様は居るし、信仰心なら科学文明に染まった社会に住む人々より圧倒的に強い。

鉄：

テレビで見る限りはそうだな。なんとか族とかだろ？

直：

うん。でも世界中に居る神様は、一部を除いて全部違う神様だ。言語の数だけ、民族の数だけ神様が居ると言っていていい。一神教とは限らないから、実際には確実にもつと多い。

この状態を考える時、それだけたくさん神様が居るからだ、と解釈するのは無理がないか？

鉄：

確かに…。

直：

で結論。神様ってのは人類の造ったもんだ。創造神なんて言っても、結局は人類に造られたって事。創造神にとっっちゃ皮肉な話だけどね。

徹：
なるほどね、お前が言つと余計に正しく聞こえる。けど、みんなそれは承知だろ。

直：
そう。みんな同じ様に思つてると思う。

咲：
私は考えた事も無かつたけど、実在しないなら人が作ったとしか考えられないもんね。

鉄：
そうだな、神を否定する以上はそうなるな。

徹：
ここまではOKだ。それでどうなる？

直：
ああ。さて、神様とは何とも便利な存在だ。空が青いのも、葉っぱが緑色なのも、夜が暗いのもみんな神様が決めた事だ。雨が降るのも、暑いのも寒いのも神様の仕業さ。何か悪い事が起これば神様がお怒りで、逆に良い事が起これば神様のお陰。便利だろ？神様さえ居れば、説明の付かない事なんか何も無くなるんだから。どう？

鉄：
古代人達がそう考えたって事だろ？ああ、それが原始宗教ってこと

か：
直：

大正解！鉄やるね。でもそんな事当たり前だと思わない？

鉄：
当たり前なのか？

直：
当たり前かはともかく、でも恐らく、確実にそうやって原始宗教は出来たんだと思う。

徹：
だな、それは確かだろう。実際、古代宗教の太陽に対する信仰の多

さも、対象としての分かり易さを思えば当然と思えるし。偶像崇拜の走り…か。

咲：

ねえねえ、さつきも思ったんだけど、偶像崇拜って何？

鉄：

プツ。

咲：

テ…ツ…！

鉄：

はいはい、偶像ってのはね、有りもしないものって事だよ。

直：

まあ、正しい意味だと木とが銅とかで作った『像』そのものを指すんだけど、『像』そのものは見たことも無い神仏を模したものだし、広義には鉄の言った事で正しいよ。

鉄：

ねえ咲ちゃん、分かった？

咲：

フン…

直：

あの…進めても…？

徹：

はい。脱線組みは無視で。

直：

だな。さて、これで古代人に信仰心てものが生れて、広く受け入れられた…ここまでは良いよな？

徹：

ああ。でもその古代宗教も、信仰の対象も変化していくよな？

直：

うん。でも、それも当然だよ。古代人だって馬鹿じゃないって言うんだけど、時代毎に当然賢い奴は居た筈だろ？そうすりゃ、矛盾点も

見えてくるし、新たな疑問も湧いて来る。そうになると、結局、神様の在り方や能力にも修正が必要になる。

咲：
それも結局人間が直しちゃうの？

直：
そうだよ。原始宗教とは言え、宗教が出来れば指導的な立場の人物が居た筈だからね。長老とか、シャーマンとかね。そいつらが新たな能力やストーリーを神様に加えるんだよ。ま、想像の域は出ないけど、無理な考えじゃないだろ？

徹：
そこから枝分かれを繰り返して現在の宗教分布に至るって訳か…。

直：
証拠は無いけどね、俺はそう思ってる。モーセだ釈迦だと名前出したけど、彼らの偉業も時代にマッチしていたからこそだと思う。人にとって信仰心ってのは必要不可欠な物だったんだと思うんだ。特に古代人にとっては、ね。

咲：
あ！ねえねえ、直って霊を信じないんだよね？

直：
ああ。

咲：
でも今、信仰心は必要不可欠と言った。

鉄：
特に古代人って言ったぞ。

咲：
そうだけど！

もう、うるさいよ。

鉄：
すみません…

咲：

じゃあ、直はどうなの？信仰心って無いの？

直：

無いよ、全く然。

徹：

はつきり否定すんな…

咲：

じゃー、じゃあ、直はお墓参りとか、お仏壇にお線香あげたりとかしないの？

直：

するよ。むしろよくする方だと思ってる。

咲：

何で？まさか世間体とか？

直：

矛盾するって言いたい訳ね？

咲：

だって…矛盾するでしょ。ねえ、徹どう思う？

徹：

ん…、まあ一見そう感じるけど、でも必ずしもそうとは言えないかな。

咲：

え、何で？

徹：

直の考え方だと、それとこれとは話が別って事だよ。仕来りとか伝統に近い物だし、霊の存在云々とは別に、先祖を敬うとか感謝したりするのは有りかなって。どう直？

直：

うん。徹の言う事も一理あるけど、俺はもっとドライだよ。

咲：

ドライって？

直：

あのさあ、なんかホントに独演会みたいになっってきたけど、また回
りくどい話して良い？

鉄：

まだ時間も早いし俺はOKよ。

徹と咲も頷いた。

直：

結論から言うと、俺は本能に従ってるだけだ。

鉄：

なんだそりゃ…

咲：

???

徹：

本能？流石に分かんねえな…。

直：

ああ、そんなに簡単に理解されたらつまんねえからな。

鉄：

あのね、時間はあるけど無理やり遠回りすんなよ？

直：

はいはい。

ところでまた質問。人間の本能って何だと思う？

鉄：

食う、寝る、やる…

咲：

馬鹿。

直：

でも、まあ普通、そう答えるよな。

咲：

にしても言い方が悪い。

鉄：

じゃあ、食欲に睡眠欲に性欲か？変わんねえだろ。

咲：

：

直：

はは。まあ大きく言えば『自己保存』と『自己複製』かな、でもちよい違う。それは人間に限ったもんじゃない。質問の仕方悪かったな。それじゃあ、哺乳類の本能って事でどう？

咲：

自己…何？

直：

ああ、『自己保存』と『自己複製』。後で出てくるかも知れないから覚えたい欲しいけど、とりあえず置いといて。今は哺乳類の本能の話…

徹：

要するに生態の特徴って事だろ？なら、子育てじゃねえか。単孔類でも有袋類でも、哺乳類に分類される動物はみんな子育てするよな。

直：

はい、そうです。

咲：

はあ。なんかホント遠回りしてる感じしてきた。

直：

いやそうでもないよ。子育てがキーワードなんだから。

咲：

へへ。じゃあ続けて。

直：

うん。人間に話を戻すけど、俺らが日本語喋ってんのは親に教えられたからだろ？

咲：

まあね。当たり前過ぎるけど…

直：

そう、当たり前。でも言葉だけじゃないだろ？要するに人間てのは、全く部何から何まで教えてもらわないと何も出来ない訳。例えば…

ああ、狼に育てられた女の子の話とか最近もあつたろ？

徹：

ああ、あつたな。食事の仕方とか色々言われてたよな。

直：

そうそう。それにこんな話もある。人間の赤ん坊をお面被つたまま、つまり顔を一切見せずに育てると、その子は笑わない人間に育つそう。それどころか、全く他の人の姿を見ずに食事だけ与えて育てれば、その子は二本足で立つ事すらしないらしい。

徹：

あー、何となく分かつたよ。

鉄：

分かんのか？

徹：

ああ。人間はどんな事でも誰かから教えてもらう様に出来てる。逆に言えば、教えられた事に従うのが人間の本能って事だろ？だから信仰心を持つかどうかも、それを教えられるかどうかが重要って事だ。教わりもしないで神や霊を信じる奴が居る筈ないもんな、だつて知らないんだから。そういう事だろ？

直：

そうそう、全くそういう事。哺乳類が子育てするのは、生きて行く術を共に暮らす期間で子供に教える為。人間だって同じなんだよ。誰かが人間として育てなかつたら、人間にもなれないのが人間なんだ。で、徹が言った通り人間が誰かから物事を教わり、それを受け入れるのは本能だ。俺がお墓参りに行つたり、お線香あげたりするのは、親にそうする様に教えられたからだよ。

鉄：

？でもそんな時よお、なんでお墓参りするのか、とかも教わつたろ？

直：

多分な。

鉄：

じゃあ、それも信じなくちゃなんねーだろうに。

咲：

そうだよねえ…

直：

まあそうだな。でも鉄、お前出掛ける直前に爪切っちゃだめとか、聞いた事無い？

鉄：

また話飛ぶの？それ何となく聞いた事はあるけど…

咲：

私はあるよ。すっごくお母さんに怒られたこともあるし。

直：

良かった。咲、その後はどうしてる？守ってる？

咲：

うん、守ってるよ。出掛ける予定入ったら、前日に必ずチェックするしね。

直：

じゃあ咲、何で爪切っちゃいけないか理由は聞いた？

咲：

そう言えばちゃんと聞いた事無いな…なんか縁起が悪いとか言われた気がするけど…

直：

ん…。いや実は俺も知らないんだけどね。でもこう思う。多分昔は安全な爪切りなんて無かったろうから、きっと爪を切るのも結構危ない作業だったんだろう。そんな危険な事を出掛ける直前になつてから、しかも慌ててすると、結構な確率で怪我をする。そしたら肝心のお出掛けそのものが中止になるかも知れないし、遠足見たいなお楽しみ行事だったら台無しになりかねない。だからそうならない様

に、戒めと言うか、警告と言うか…そんな目的で言われるようになった物なんじゃないかと思うんだよね。ことわざ…みたいなもんかなあ。

それでね、実は俺も守ってる訳よ、ガキの頃からずっと。理由も謂れもハッキリしないのに、親にそう教わったが為に止められない訳。俺にとっては墓参りも同じ。理由を聞いて『違うんじゃないの？』と思っても、どうしようもない苦痛が伴うとかならともかく、苦にならない事は止められないんだよ。これって説明になってないかなあ？

鉄：
まあ、何となくだけど分かる気はするよ。食い合わせとかでもあるんだろ、根拠の無いヤツって。それと同じと思えばいいんだろ？

直：
おゝ、いい事言うじゃん！それだよ、それ。

鉄：
大袈裟な…。な〜んか腹立つのは気のせいかな？

徹：
ははは、気のせいだよ鉄。

なあ直、社会性とかは関係無いの？

直：
あるよね。やっぱ徹は的確だね。咲に世間体って聞かれたけど、あの意味正解だろ。

咲：
やった！

鉄：
やっぱム力つく…

直：
まあまあ…。誰かが誰かを教育するのが人間社会だから、社会性はどうしても必要になる。奇人変人なんて言うけど、そう言われない為には常識になっていいる事はするべきだろ。お墓参りなんかには、

その要素が満載だからな。

徹：

直の結論なら、霊の存在とそれを肯定するかのような行動には矛盾があつていい訳か…霊どころか宗教もなにもみんな否定する訳だな。

直：

信仰心は否定してないよ。先祖を敬う事も、死者を悼む事もね。これは心の問題だと思つてるだけだよ。

徹：

なるほどね。しかし随分遠回りしてるな、ホントに。

直：

そうかもな。でも人の心理と行動を独立させて、それでいて両立させて考えるには、やっぱり避けて通れないよね、信仰心と本能は。

徹：

ん…

俺、トイレと言って鉄也が席を立った。美咲も空き缶と、空いた皿を持ってキッチンへ向かう。自然な流れで小休止となった。

小さな討論会2

トイレとキッチンに向かった二人が戻り、小さな討論会は再スタートした…

鉄：

今…、トイレでふと思ったんだけど…。

なんか、結論聞いちゃった気がするんだよね…。直の話じゃ、全部人間の作り話って事で、以上終了じゃねえか？

咲：

私もそう感じたけど、でも…だから霊を否定する根拠にはならないんじゃない？

徹：

ん…。神も霊も人間が作った。伝承は否定されず、人の本能が今もそれを受け入れている。こんな感じか…

話の筋は正しいと思えるけど、『だから霊は居ません』じゃ、確かに弱いよな。

鉄：

でも全部、人間の所為にしちまえば、それ以上はないぜ…

咲：

それって、直の言う神様と同じだね。

直：

あゝそういう見方もあるな。

でも、そんだけ人間の脳は傲慢だって事だろ。

咲：

じゃあ…あのぉ、霊が居るとしたら、何が問題なの？

直：

問題？

咲：

あはは。実はね、直の話は良く理解できてる積りなんだけど、神様とか本能とか、遠回りというか話が大き過ぎて、なんかピンと来ないのよ。だからもう少し身近と言うか、スケールの小さい話にしてもらえないかなあゝなんて思っ。あはは。

鉄：

私は馬鹿だから分かり易い話にしてっ事？

咲：

馬鹿は余分！そういう鉄だって難しい話は苦手でしょ？

直：

いやあ…、極めて易い話をしてた積りなんだけど…

徹：

直、分かるけど、ちょっと意味が違ってみたい。

直：

意味？

徹：

だって、テレビの話位しか、霊とか幽霊って言葉すら殆ど使っ。無いじゃん？

直：

ああそう言えば…

徹：

だから、もう少し具体的に霊の話をしませんか？っ事だよ。

直：

なるほどね…

鉄：

そう言えばそうだな。咲、茶化してゴメン。

咲：

え？べ、別に良いよ。気持ち悪いから謝らないでよ。

徹：

じゃあ、そういう訳で直、霊の話を中心に続けようや。

直：

いいけど…、じゃ何の話から行く？

…無言の数十秒…

直：

またかよ…

無いならまた、俺が回りくどい事言い始めるぞ？

…無言の数十秒…

直：

だめだな。

じゃあ、今度は質問ではなくクイズです。

鉄：

クイズ？

直：

そうです。

それでは問題です。

三大オカルト、幽霊・UFO・超能力。

俺は基本的に全て否定ですが、「もしも」存在するとしたら、可能性が最も高いと、「俺」が思っているのはどれでしょう？

徹：

UFO

咲：

UFO

鉄

UFO

直：

なんでやねん…。

鉄：

だつてお前、昔から宇宙人は絶対に居るって豪語してたる。

直：

そうだけど、あんまり偏るから…

徹：

で、正解は？

直：

超能力です。

咲：

え〜〜？一番無さそう…

直：

では二番目は何でしょうか？

徹：

UFO

咲：

UFO

鉄：

UFO

直：

またか…

でも残念ながら正解です。

徹：

はあ。直にとつちや、霊は超能力以下ってか…。で、何でだ？

直：

ああ、超能力・UFO・幽霊。全部無いと思ってるし、全部人間が作ったもんだと思ってる。

で、これらが世に広まり、市民権を得るにも全部人間が係わってる。この「全部人間」がポイントなんだけど、まあ広めたのはマスコミとしても、当事者として係わってるのはそれぞれ、超能力は超能力者・UFOは目撃者・幽霊は霊能者、だろ？

徹：

まあ…そうだな。

直：

この中で、『自分がそのものだ』と主張してるのは超能力者だけだ。UFOの目撃者は宇宙人じゃないし、霊能者も幽霊じゃない。

徹：

うん…、だから？

直：

超能力だけは、再現性がある筈だし、科学的調査も、本人の協力があれば何時でも出来る筈だ。でも他は『本人』じゃないから無理だ。だから『もしも』本物が居るとしたら、最も証明し易いのは超能力だと思う。違うか？

鉄：

そう…だな。

徹：

確かにそうだ。でも、直が何を言いたいのかが分からねえ…

直：

俺もだ。

徹：

はあ？

直：

冗談だよ。こんなクイズ出す必要はなかったんだけど、みんな無言だったから遊んでみた。でも折角だからまとめると…

超能力は本人が主張している場合が殆どだ。だからそいつを調べればいい訳で、逃げ隠れする様なら偽者と判断すりゃ良いから、真否の議論に意味は無い。

UFOは雨が降るのを待つと同じ。俺は宇宙人は絶対居ると思ってるけど、そいつらが乗り物で地球に来てるとは思わない。もしも来ていたり、これから来る事があるのなら、UFOには実体があるんだから、そのうち見つかる筈。だから議論しても仕方ないし、するならオカルト扱いでなく、科学として恒星間飛行が可能かどうかを論じるべきだ。

で最後が幽霊だけど、コイツに実は困ってる…

徹：

それだけ一気に行って、幽霊でストップか。

で何に困ってるって？

直：

それを言い出す為に、これだけ遠回りしちゃった。

困ってるのは実体が分からねえ事だ。

徹：

実体？実態じゃなくて？

直：

実体の方。勿論実態も分からねえけど、先ずは実体の方。

さつきも言ったけど、今現在、霊の存在を主張している中心は霊能者だ。ところが、悪い事に霊能者にも流行り廃りがある。おまけに霊能者毎に言ってる事が微妙に違う。いや良く聞くと結構違う。だから、結局どの話が本筋なのかも分からない。という訳で霊の実体が掴めないんだよね…俺には。

鉄：

確かにバラバラな事言ってる気もするなあ…

直：

更に年々、言う内容まで変わってきてる。

鉄：

そうか？

直：

ホントだよ。例えばだ、昔は確かに『背後霊』って言葉があったろ？

鉄：

あつた…。つてか今でもあるだろ？

直：

でも大半の霊能者の口からは出て来ないよ。

徹：

確かに聞かない気がするな。

直：

だろ。

昔見たんだけど、俺の従兄弟が持ってた古い本には、確かにこう書いてあつた。

『人には守護霊と背後霊がついている。守護霊は一人に一人だが、背後霊は多い人の場合は10人以上にもなる。守護霊はその人の人生を導く為にあり、背後霊は言わば応援団の様なものである。背後霊の中に野球選手が居たら、その人は野球が上手になったりする。つまり、守護霊は人生を導き、背後霊は才能や個性に影響する』つて、まあこんな感じで。ガキだった俺は、へく、なんて思ったのを覚えてるけど、今じゃ『背後霊』なんて言葉は絶滅危惧種入りしてる。

咲：

そう言えば聞かないね。聞いてもお笑いのネタだったり…。

鉄：

てか、背後霊がそういう存在だったって始めて聞いたよ。

直：

ガキの頃、既に古い本だったから、30年かそれ以上前かも知れないけど、その程度の年月で霊の在り方なんて変わるのか？

徹：

それじゃ、困るよな…

直：

だろ？

だから霊がどんな物かって、その実体は把握出来ないと思うよ、俺

は。

徹：

じゃあ…

直：

俺としては、霊の話をするなら、霊の在り方を定義して欲しい訳。と言うより、定義しないと議論が成立しないじゃん。

徹：

そういう事か…。でも…どうしよ。

直：

さっき言った通り、霊能者の弁はコロコロ変わるから、どいつの言う事聞いたら良いのか、本当はどう考えるべきかも分からない。これじゃ指針が無くてやっぱり議論なんか無理だ。

だから、『今ここだけ』で良いから、霊とは何かを定義して欲しい訳よ。

徹：

なるほど。ローカルルールって事か。

直：

そ。

いやぁホントに遠回りしちゃった、ははは。

徹：

それなら、俺達三人は一応肯定派な訳だから、霊の在り方についてお前の質問に答えるよ。それを一応の実体として決めるって事でどうだ？

直：

それをこの討論会に於ける霊の実体で且つ、実態とするって事で良いんだな？

徹：

そういう事にしよう。確かに基準になる物は必要だし。

直：

でも徹、お前の仏教知識は要らないからね。ここでは宗教的な思想

は必要ないから、一般論としての霊の『像』を頼む。

徹：

分かった。みんなもそれで良いな？

鉄：

おう。でも俺、よく分かんねえぞ？

咲：

私も…。

徹：

良いんだよ。結局誰かから聞いた知識しかないんだから、その中で自分で正しいと思うことを言えばいい。意見が割れたらその時は相談って事で。

咲：

うん…。

直：

OK、じゃあ聞くぞ。

まずは人と魂の関係を教えてくれ。

徹：

魂は人に宿っている…の他に言い方無いな。

直：

一人に一つか？

徹：

そりゃそうだ。

直：

二重人格の場合は？

鉄：

そりゃ、話が別だろ。

直：

分かってる、冗談だよ。

で、その人が死んだら魂はどうなる？

咲：

体を抜け出して、天国に行く。

直：

天国って？

徹：

分からない。でも所謂、霊界だな。

直：

霊界って何処にあるの？なんて質問はしないけど、その霊界ってのは、俗に言う『あの世』と同じ意味で良いのか？

徹：

ああ、それでいい。

直：

あの世に行った魂は、そこで何してんだ？

咲：

ボ〜っと？な訳ないね。

鉄：

修行：生れ変わる為に。

徹：

俺が聞いているのはこうだ。

魂は霊界に上がると、来世に向けて歩き出す。精神修行したり、まあ色々。実はここがいきなりハッキリしないんだけど。で、ある程度ステージの進んだ霊は、現世に生れ出る赤ん坊の守護霊になる。その赤ん坊が死ぬまで付き添い、その子が死ぬと再び霊界に戻る。その後、これもハッキリしないんだけど、自分自身が生まれ変わってこの世に再び生れてくる。ただ、あの世の時間軸はこの世と進み方が違うから、数百年を過ごしても決して長くはないらしい。大体こんな感じだ。

直：

ま、俺が聞いているのもそんな感じだよ。あの世はただ歩いているだけとか、現世と同じ生活してるとか、そんなのも聞いた事あるけどね。

で、二人も徹の説明で文句ないのか？

咲：

ないよ。要するに死んだらあの世へ、で、そのうち生まれ変わって再びこの世へって事でしょ。

鉄：

俺も文句なし。途中がハッキリしないのはみんな同じだろ。

直：

うん。途中はそんなに重要じゃないし。でも今の話で質問を少し。守護霊つてのは一人に一人で良いのか？掛け持ちとか無し？守護霊の居ない人も無し？

徹：

一人に一人。掛け持ち無し。守護霊の居ない人も無しだ。実は違う話も聞いた事あるけど、俺は今言った通りで良いと思う。

直：

二人も異論はない見たいね。じゃあ次。生まれ変わるまでの期間は数百年で良いのか？

咲：

すぐ生まれ変わる事もあるって聞いた。

徹：

俺もだ。さっきの説明は一般論で、例外もある。誰かの守護霊なんかやらずに生まれ変わる事があるんだそうだ。だから、数日から数百年の間に生まれ変わる…かな。自分でも言ってる無理がある気はしてるけど…

直：

うん。それじゃ次に進もう。

それなら、幽霊つてのはどんなもんだ？魂とはどう違う？

鉄：

死んだ後、あの世に行かず、この世に留まった魂が幽霊だろ？

徹：

だな。この世に強い未練を持った魂は、素直にあの世に行こうとし

ない。その結果、霊界に行けなくなってしまうって、この世を彷徨っているのが幽霊だ。

直：

所謂、成仏出来ない霊って事ね。

徹：

成仏は仏教用語だよ。敢えて使わないの、大変なんだぞ。

直：

そりゃ済まん。でも一般的になってる言葉は使って良いって。俺が言ってるのは宗教思想とか、そのまんま経典使われても困るって話だから。

徹：

ああ、分かってはいるんだけどね。

直：

うん。話戻すけど、未練つてのは強い怨みとかも入る訳ね。

徹：

勿論。それに、あまりに突然死ぬと、自分が死んだ事が理解出来ない事もあるらしいから、そんなのも幽霊が誕生する一因かもしれない。

直：

なるほど。ま、大体俺の聞いている通りだよ。

そういう意味で、認識は意外と一致してるかもね。

もう一点、これって俺的には非常に重要なんだけど、生まれ変わり、つまり輪廻転生は、さつきも話に出てたな。これって、人間から人間だけなのか？前世が犬とか、来世がネコとかあるの？

咲：

ないんじゃない？

鉄：

でも大真面目に『あなたの前世は犬でした』って言った霊能者、テレビで見たぞ。

徹：

俺も色々聞いてるけどハッキリしないな。犬とかネコとか、ある気もするけど…。

直：

ほう…。割れたな。

直はそう言って再びタバコに火を点ける。

小さな討論会3

直：

俺にとつちや、どつちでもいいけど、意見が割れるのは困るな。

徹：

俺はどんな生命にも、魂は宿つてると思うんだけど。

直：

虫にもか？仏教思想が見え隠れしてる気がするけど？

徹：

虫でも何でもだ。それと、仏教は関係ない。

鉄：

そう思いたいのは分かるけど、全てとなると無理があるんじゃないか？

徹：

何で？

鉄：

だって…じゃあ天国に咲いてる花は、花の霊か？

徹：

そう…だろ。

鉄：

三途の川には魚の霊が泳いでんの？

徹：

…うん。

直：

そついや、天国に海があるって、聞いた事ないなあ…海の魚はどうなるんだろ。

徹：

そう言われるとな…でも聞いた事ないだけで、海があるのかも知れないし。

徹：

そう言われるとな…でも聞いた事ないだけで、海があるのかも知れないし。

直：

それなら、天国は地球そっくりって事になんのか？

又はカオスの世界とか…

魚が空を泳いで、ライオンとシマウマが仲良しで、そんなのも嫌だな。

咲：

でも、この世と同じだって聞いた事あるよ？きっと海もあるんだよ。

鉄：

そつなの？俺は聞いた事ないけど。

咲：

私は聞いた事ある。森もあるし海もある。望めば何処にでも住めるし、環境も好きなように変えられるって。だから天国なんだって言うってた。

徹：

それなら、全ての生命に魂が宿ってても…

直：

いや、咲の言う通りだとそれも困るぞ。

徹：

なんで？

直：

咲は環境も変えられると言った。環境には他の生命が付いて来るだろ？花でも森でも生命だぜ。そいつらは人の魂に強制連行されるのか？

徹：

ああそうか…

直：

こりゃダメだよ、まとまる訳ない。ま、俺から見たら、これが心霊の真実だと思えるけどね。

鉄：

どういう意味で？

直：
そいつはまた後だ。それより、仮説で良いから決めてくれ。魂が宿る生物の範囲と、別種への転生の有無だよ。天国の話はもうどうでも良い。
任せるから決めといて。俺、トイレ行って来るから。

直：
まとまったか？

徹：
無理だよ。だから総意とは言えないけど、無理やり決めた。
全ての生物に魂は宿るけど、転生は同種。つまり、人間は人間。例外はあるかも知れないけど、ここでは考えない。
以上だ。

直：
ふん…

徹：
何か不満か？

直：
うん…。自分で封印しといて悪いけど、仏教に精通している者として、その結論で良いのか？

徹：
どういう意味で、だ？

直：
仏教的には輪廻転生は認めてるけど、それって必ずしも良い意味じゃないよな？

徹：

良く知ってるな。そうだけど、一般には輪廻転生って、当たり前のように受け入れられてるだろ？だから良いんじゃないか？

直：
違うよ、お前に仏教に対する罪悪感みたいなものがなければ良いって話さ。

徹：
だから…だよ。

仏教じゃ、六道と言って輪廻先が六つある。その内、人間としての輪廻は『人間道』と言って本来『苦』として扱われてる。因みに『畜生道』と言って動物類のそれもある。俺が全ての生命に魂が宿ると考えるのは、それも多少影響している。

でも、多くの人はそんな事を知らないし、みんな前世を信じ、来世があることを望んでるだろ？だから俺もそれで良いと思ってるし、仏教上でも、輪廻の輪から外れるのは簡単な事じゃないからね。何より、俺自身がその方が自然だと思ってるから問題ない。

直：
分かった。お前がそう言うならOKって事にしよう。

徹：
気を使ってもらって悪りーね。

直：
いいえ、どういたしまして。

咲：
そう言えば…

鉄：
どした？

咲：
天国とか輪廻とか、今仏教の話もでたけど、それって宗教ごとに違う解釈なんですよ？

直：
その通り。

咲：
じゃあ、何が本物かわかんないじゃん…

鉄：
だからローカルルール作ってんじゃん。

咲：
でも、良く考えたら、それっておかしくない？

鉄：
まあ…

直：
そうだよ、おかしいんだよ。でも、それは考えない事にしてみんな
霊云々を信じてるんだよ。信実なんか分からないの、永遠にね。

徹：
そう言ってしまうばそれまでだけだな。

直：
咲の言った通り、宗教ごとに死生観は全て違う。仏教の話も出たけど、輪廻なんか認めてない宗教も有るし、曖昧にしてる宗教もある。逆にヒンドゥー教じゃ輪廻は基本中の基本になってる。これはカー
ストを守るためだろうから、まあ別格かな。

咲：
カーストって何？

直：
身分制度だよ。ヒンドゥー教じゃ人は平等じゃない。生れた瞬間に
その人の身分が決まり、一生変えられないし変わらない。その為に
来世という教義があって、今生の行い次第で来世での身分が変わる
って訳。

咲：
うわ。なんか、ちょっと酷い話…

直：
そうだな。一応、今は禁止されていて無いことになってるけど、ど
この世界にもある謂われ無き差別と同じで絶対無くならないだろう

な、完全には…。

咲：

キリスト教とかはどうなのかな…

徹：

さあ…、俺もキリスト教と言われると詳しくないけど。

直：

キリスト教は輪廻転生は認めてないよ。だから、日本人の理解している意味での前世も来世もない。ユダヤ教も同じだろう。多分イスラム教も。これは自信ないけど。

多分この三つの一神教には、そういう教義が無いんだと思う。元々同じ神様だしな。

要するに、死生観てのは宗教とか民族とかで違うのさ。

あ、言い忘れたけど、それでもキリスト教徒の中には教えに無い輪廻を信望している人は多いらしいよ。聞いた話で事実には知らんけど、でも映画なんかのセリフでは聞いた気もする。

つまりさ、人間て自分に都合な情報はどんどん取り入れてしまっ
つて事だよ。やっぱり人間の脳は傲慢で自己中なんだよ。

鉄：

今、なんか凄い事聞いたような…

咲：

何？

鉄：

元々同じ神様とか何とか…

直：

ん？ユダヤ教とキリスト教とイスラム教の神様だろ？そっだよ、元々
々ってか、今だって同じ神様だよ。

鉄：

じゃ、なんであんなに仲が悪いんだよ。

徹：

直、それホントなの？

直：

徹も知らなかったのか？

徹：

ああ。

直：

キリスト教は元々ユダヤ教から始まってんのは知ってるよな？

徹：

それは知ってる。

咲：

知らなかった…

直：

咲には悪いけど置いてくぞ。

俺だって詳しい事は知らないけど。

ユダヤ教に登場した神様は天地創造の神にして唯一絶対神だ。ユダヤ教の腐敗を嘆いたイエスがキリスト教を興したとも言われてる。それから数百年後にムハンマドが説いたのがイスラム教だが、信仰対象はユダヤ教の神様。要するに、全部旧約聖書に書かれている神様を崇拜しているんだよ。

鉄が言った通り、それにも拘らず、キリスト教とイスラム教は仲が悪い。

これも結局は人間のエゴじゃないのかね。ホントのところは分からないけど、キリスト教徒にしてみたら、後から出てきたイスラム教はパッチモンに見えただろうし、イスラム教徒はそんな事お構いなしだろ。今の新興宗教を考えればイメージできるんじゃない？

鉄：

そりゃ分かるけど、同じ神様信仰してんのに、戦争の歴史しかねーだろ。

俺は、キリスト教とイスラム教は全く逆向きの宗教なんだろうって勝手に思ってたよ。それにしても聖地が近いなあ…とも思ってたけど。

徹：

聖地は近いどころか何箇所も被ってるだろ。

咲：

置いてかないで…

直：

遅。

だから、徹には悪いけど、俺は宗教を一切信じないんだよ。家は仏教だから、誰か死ねば仏教式で葬式出すし、仏教徒として振舞うけどね。

神様が居ようが居まいが、輪廻転生があるうがなかるうが、真実は一つである事が自然だろ？それなのに、ベクトルの違う宗教が世界中にいくつあると思う？俺も知らないけど、とにかくいっぱいあるよ。こういう場合、どれか一つが本物で、他は全部偽物と考えるのが自然か？

違うな、合理的に考えれば全部偽物だよ。

少しばかりの沈黙が、四人に訪れた…

小さな討論会 4

直：

黙っててもしょうがないな。

具体的に話だったし、宗教と輪廻の話も出たから、その線で話進めて良いか？

徹：

ああ。頼む。

直：

分かった。じゃあ、進めよう。

いきなりだけど、人類って多数決が好きだよな？

咲：

ああ、なんか凄い遠回りの予感…

直：

大丈夫だよ。そんなに遠回りしないって。

咲：

期待してる…。

直：

一番信者の数が多いのはキリスト教だ。で、さっきも言ったけど、キリスト教は輪廻転生を認めてはいない。ここまでのいいか？

徹：

ああ。

直：

話は変わるけど最近またテレビ見てると、前世だオーラだが流行ってるよな？

鉄：

確かに。

咲：

江さんがブレイクしてから、なんかブームって感じだね。

直：

うん。みんな、あの手の番組見てどう感じるの？

鉄：

どうって言われてもなあ。あの人は本物っぽいと思ってたけど。

咲：

悪い人には見えないしね。

徹：

大御所も付いてるし、結構信用できそうかな…と。

直：

いや、江さんの話じゃないんだけど…。確かにテレビ用でなく普段もあのままなら良い人だろうね。

で、俺が聞いているのは「あの」番組でなくて『あの手』の番組です。どう思いますか？

鉄：

どうって…。ホントっぽいとかウソっぽいとか色々だけど…

咲：

………

徹：

まあ、そういうこともあるんだなあとか思うけど？

直：

ふん。

やっぱり信じてる人って、ポーっと見ちゃうんだな。

鉄は理由が違う気もするけど。

鉄：

オ、オイ！

徹：

じゃあ、お前はどっ見てるんだよ。

直：

俺は時々、笑える時がある。

咲：

笑うの？

直：

ああ、笑える。時々呆れて、時々腹が立つ。でも止められなかったりもするけど…

咲：

何で？

直：

だってよく、よく「前世はナニナニでした」って言ってるけど、日本人かヨーロッパ人の確率が異常に高いと思わない？

徹：

まあ、確かにそんな気もするかな…特に江 さんは。

直：

あの方の場合はね。テレビじゃ芸能人相手だから、個性的だったり才能のある人も多たって事で、ヨーロッパ人が多いのかもしれないけど、にしてもヨーロッパ人の頻度が高いよな。それに当たり前の様に日本人も。

でも、これって普通に考えておかしいよ。

鉄：

…と、言つと？

直：

ヨーロッパは昔から主にキリスト教だよ？輪廻転生は無い筈の人々が日本人に生まれ変わってるなんて、バチカンが聞いたら怒るだろ？

徹：

それはそうだけど、輪廻があるなら仕方ないだろ。

直：

まあそうだな。じゃ次だ。

今現在の地球の人口は何人が知ってる？

徹：

65億くらいか。

直：

そう。

じゃ日本の人口は？

徹：

1億2000万人位だろ。

直：

正解。1億2000万〜1億3000万人位だ。

昔から世界の人口割合が大きく変化していないとしたら、日本人は常に地球の全人口の50〜60分の1しか居なかった筈、じゃない？

徹：

まあ、多少変化するだろうけど、国土面積から考えても…

あ…

直：

気付いた？

徹：

ああ、確率的には前世が日本人である可能性も50〜60分の1になる筈、か。

直：

ご名答。

つまり、せいぜい2%って事だ。

咲：

そうなるの？

徹：

確率で言えばそうなるよ。

鉄：

でも…血縁関係とか同一民族とか、輪廻の傾向に偏りがあるんじゃないの？

直：

だよな、そう思うだろ？でも、だ。

じゃあ何でヨーロッパ人が多いんだ？

鉄：

あ…そうか。

直：

今の人口分布が、過去に遡っても大きく変わらないと仮定した場合、前世として登場する三人に一人はインド人か中国人になる筈だ。ジヤンケンみたいなもんか。でも、滅多に聞かないぞ」「あなたの前世はインド人です」って。

徹：

確かになあ…。

しっかしお前、良く見てるなあテレビ。

直：

その言い方は引つかかるけど、とり合えず無視して進めるけど、逆に俺から見たらよく何の違和感も感じないもんだと思うけどね？

鉄：

すんません…

直：

ヨーロッパ人は妙に「中世」の人が多くて、日本人の場合は「江戸時代」の人が多い気もするしね。結構バリエーションが無いと思う。で、これもおかしいの。

徹：

もう聞くしかないね。

そいつは一体何故ですか？

直：

とり合えずヨーロッパ人を忘れて日本人に絞る。その上で、鉄の言った理由が的を射てると仮定して、日本人から日本人への輪廻が高精度で起こるとすると…。

鉄：

すると？

直：

数が足りん。

徹：

はあ？

直：

日本の人口は今、1億2000万〜1億3000万人位。でも、明治維新前にはたった4000万人位しかいなかったんだ。だから、この150年位の間には日本人は三倍に増えた。

輪廻転生までの時間を数百年としたけど、江戸時代がいくら長かったとしても、江戸の人全員が今を生きていても足りないかも知れないぜ、守護霊も背後霊も幽霊も必要なんだから、これは苦しいぞ。

咲：

だけど、もつと昔を生きていた人達も居るんだよ？

鉄：

江戸時代の人か前世で出てくるんだから良いんじゃないか？

徹：

なるほど、良くないのかあ…

直：

そう、良くないの。

分かり易く、と思っただけ、逆効果だったみたいね。

という訳で世界人口で考えよう。

今の世界人口は約65億人だ。でも最初から人類は65億人居たわけじゃない。30億だった時もある、10億だった時もある。時代を遡れば徐々に減って、要するに例えば世界人口が1万人だった時もあった訳だ。

咲：

う…ん。

直：

1万人からだと、今は6万5000倍に増えた事になる。

咲：

考えたくない…

直：

でもこれなら分かるだろ？魂が足りなくなるって事。

だけどね、実はね、本当は真逆なんだよ。

咲：

更にややこしいのお…

直：

そうでもないけど…少しね。

咲：

はあ。私は置いてって…

直：

そうする。

今、地球人は65億人。守護霊が一人に一人と決めたから守護霊分で65億人。幽霊は無視しても、現在の人間が生きている為に130億人分の魂が地上にあることになる。

輪廻に至るまでの時間を例えば300年とすると、平均寿命を70年と仮定しても、65億の4倍は魂があので待機している必要がある。とすると人口65億の都合6倍、つまり全部で390億人分の魂がどこかに存在している事になる。

但し、これは甘い見積もりの上、これ以上人口が増えない事を前提にしている。ガダムの世界のように宇宙にまで人類が進出するとなれば、人類はスペースと食料さえあればいくらでも増えるから、こんな数じゃなくなるはずだよ。

とにかく、こんな莫大な数の魂を、人口一万人の時代から確保していたと考えるのが、果たして自然ですか？

徹：

さすが技術屋。理に適ってる考え方だな。確かにおかしいよね。

咲：

そうなの？それだけ居たって事じゃダメなの？

直：

それでも構わないんだけど、少なくとも自然ではないよね。

それと、良くは知らないけど、多分世界人口も日本のように、産業

革命以降辺りから急激に増えたんじゃないかと思うのよ。となるとね、江戸時代を生きた人になんか、まだ輪廻の番が回ってきてないよ、多分。

とにかく、人口1万人時代に、相応の数の魂しかなかったとしたら、玉不足で現在が成立しない。逆に人口1万人時代から圧倒的な数の魂があつたと言われるとそれはやたらに不自然だ。どう解釈するのも自由だけど、俺はこの不自然さを認められない。そんだけ。

鉄：

はは。恐れ入りました。

徹：

参ったな…

またまた沈黙が訪れた…

小さな討論会5

徹：

だけど…

直：

何？

徹：

人類繁栄の陰で、絶滅していった生物も居る。例えばだけど、魂の数、つまり総量が一定なら良いんじゃないか？

直：

ま、そういう考えになるだろな。だけど地球生命も最初は極少数だった筈だから、考え方は一緒だよ。それに宇宙全体でも同じ。天文学的な数の魂がビツクバン以前からあったなんて無理な考えだ。だからって魂が生物と一緒に生まれたりするとしたら、輪廻は必要なくなるし。

だから魂なんか無いと考えりゃ何の矛盾もない。俺はそう思うね。

徹：

そうか…

咲：

じゃあ…、霊についての話って全部嘘なの？私は感じるんだけどなあ……

直：

咲は、幽霊見た事あるの？

咲：

靈感あるって言ったけど、見たのは一回だけ。

直：

いつ？

咲：

会社に入ってから、研修で名古屋に行ったんだけど、その時泊まっ

たホテルで。

徹：

ああ、あの名物研修な。

咲：

そうそう。

直：

ふくん。一回だけか。

咲：

うん。どんなだったか聞かないの？

直：

うん。俺ほら、聞いても説明できないから中身はどつでもいいの。

そう言えば、一回だけ見たって人多いよな…。てか「何回か見た事ある」って人も含めたら、体験者の大半になるんじゃないか？

咲：

中身はいいんだ…

鉄：

そうだな、確かに多いかも。合コンとかしてても、大体の女の子は「あるある」アタシも一回だけ」って。そういう子多いぞ。

徹：

サンプルが合コンの女の子かよ。

まったく羨ましい…

咲：

ト・オ・ル君？

徹：

はい、じよ冗談です。

でも冗談抜きで多いんじゃない、一回〜数回までの目撃経験者って。

直：

だろ？そうだよな。

でもおかしいと思わない？

咲：

何で？

直：

てかさ、咲はその経験が幽霊だって確信出来る？

咲：

勿論そう思ってるよ。

直：

そうか…。

なら、咲の経験には触れない事にして進めよう。いいか？

咲：

中身はいいのね、ホントに…

鉄：

あきらめろ、咲…

徹：

いいから進めてくれ。

直：

そうします。

幽霊って、この世に怨みやら未練やら…で誕生する事になってたよ

な？

徹：

そうだ。

直：

で、目撃談にはスツゴイ古い時代の幽霊も居るだろ。落ち武者なんて良い方で、十二単着てました、なんてのもあるよな？

徹：

うん、あるな。

直：

咲の見た幽霊って、何時代の人？

咲：

えっ、えっと、多分現代人だと思う。

直：

ふうん、現代の人ね。ま、基本的には現代の人が多いんだな。

咲：

やっぱり中身は良いんだ…

鉄：

だから…

直：

ところで、生きてる人間に対してどの位の割合で幽霊が居ると見積もれば良い？

徹：

また計算か…。って、どう考えりゃ良いんだよ…

直：

分からん…。

でも、現代人の幽霊目撃が多いとは認めても、かなり古い霊も目撃されてる訳だから、相当な量の幽霊がフラフラしてるだろ。

咲：

フラフラって…

直：

ここは数字で示せないけど、でもかなりの数の幽霊が居ると思って良いだろ？

徹：

それは確かにそうだ。

直：

だとしたらだよ、何で一回だけ見たことがある人がそんなに居るんだ？

徹：

は？

直：

徹、幽霊見たことは？

徹：

何となく『あれは幽霊だったのかな』と思える経験は寺で何回かあ

る。

でも、姿を見たと言えるのかは自分でも疑問。下向いて漫画とか読んでると、視界の端の廊下を人影が横切った気がした事が何回かあって。勿論、人が通るはずの無い場所とタイミングでね。だから、俺の体験が「気のせい」でなければ幽霊と考えるのが自然かな、ってレベルの話だけど。

直：

寺での話か。中身は結構リアルだな。

咲：

私の話は聞かないのに…

鉄：

もう言うな、咲…。

直：

鉄は見たことある？

鉄：

いいや、俺は一回もねえ。

直：

俺も無い。

さて、一回でも見たことがある人、何回か見たことがある人、霊能者級に見える人、そして俺や鉄みたいに全く見た事が無い人。この差は何？

徹：

靈感。

直：

だよな？

でも、一回でも見た事がある人って、靈感があるんだよな？

徹：

だから少しあるって事だろ。

直：

そう。でもたとえ少しでも靈感がある。

鉄：

だから？

直：

少しでも靈感のある人が、一生の中で目撃体験が一回だけか？

徹：

だからレベルの差って事だろうよ。

直：

そう、レベルの差。必ずそう結論付けられる。でもホントにそうか？

徹：

何が言いたい？

直：

一年は365日、十年で3650日、二十年で7300日だ。三十年なら一万日を越える。僅かでも何でも靈感のある人が、そんなだけチャンスがあつて一回か？二回か？

徹：

そう言われると少ない気はするけど、レベル差は数値化出来ないんだから確率は計算できないって。そもそもこの考え方には無理があるよ。

直：

何で？

徹：

霊には色々なタイプが居るんだ。お前の言う「フラフラ」している霊も居るけど、思い入れのある場所に縛られている地縛霊も多い。地縛霊にはその場所に行かないと遭遇できないから、チャンスは日数とは関係ない。それに「フラフラ」している浮遊霊だって、霊道の周辺とか行動の範囲は絞られてくるから、そう簡単には会わないって。それに靈感のレベル差が重なるんだから、滅多にお目に掛かれないのは仕方ないだろう。

直：

良くぞ言ってくれました！

徹：

はあ？

直：

今のお前の答えはまったく模範解答だ。

でも、その模範解答って、全部人間が作った後付のこじつけ理論だと思えないか？

徹：

話、すり替えんな。幽霊との遭遇確率の話だろうが。

直：

すり替えた訳じゃないさ。咲の「幽霊の話は全部嘘か」の質問に答え様としてるんだよ。

徹：

お前、畏張りやがった？

直：

人聞きの悪い事言っなって。でもお前のお陰で話しやすくなったけどね。

徹：

ひでえ奴…

直：

まあまあ。

一気に俺の考え方の結論に進みたいんだけど良いですか？

鉄：

ああ、どうぞ。

咲：

私の話、結局聞かずに結論なの？

直：

悪いね。咲の話聞いても良いけど、その上で否定論展開したら、咲を否定してるみたいになるだろ？俺がやり辛いから避けただけだよ。でも、咲にはもう一度記憶と戦ってもらいたい。その名古屋で見た「モノ」は、幽霊以外有り得ないのか、「幽霊ではない」という前

提に立つたら、他の結論は出てこないかどうかをね。

咲：

うん…。

直の結論聞きながら考える。

徹：

結論てのは、否定の根拠か？

直：

そいつは無理だよ。

否定に根拠は無いし、証明も無理だって言っただろ？

だから、俺が考えるところの、ストーリーだよ。これまでの話のマトメみたいなもん。

徹：

ふん。

じゃ、とり合えず聞いとくか。

直：

そうしてくれ。

勿論、その上で反論宜しく。

徹：

了解した。

小さな討論会6

そして直樹は、自論を展開させてゆく。

直：

悪いけど長くなるかもね。

徹：

分かってるよ。

咲：

途中で質問しても良い？

直：

そりゃ勿論。

咲：

分かった。

直：

じゃあ始める。人類は昔、狩猟採集生活をしていた…

鉄：

つて、そこからかよ！

直：

そうだよ？

鉄：

長。

直：

じゃ、哺乳類誕生からにする？それとも、生命の上陸からか？あ、脊椎動物の誕生とか…

鉄：

あの…良く分からないんですけど、だんだん古くなってますよね？是非、人類の話からお願いします…。

直：

はいはい。

では改めて。でもサクッと行くから心配すんなって。

それから結論と言っても、証拠も何も無い、こう考えると霊は居ない方が自然じゃないの？レベルだから。それから前にも出た話の繰り返しになるかも知れないけどよろしくね。

直：

では…。

人類は猿と共通の祖先から進化した。それを良しとしない宗教もあるが、科学的には疑いようが無いだろう。

鉄：

はい。

直：

はいって…。ま、いいか。

え、二本足で立った人類は、移動を重ねつつ狩猟採集生活をしてきた。

狩りを中心に木の実や果物を探して食料にする生活ね。で、狩猟採集生活は決して楽じゃない。食料の調達に苦労したり、他の群れとの戦いもあっただろうから。それに、肉食獣に襲われた人類の化石がある様に、当時の人類は今みたいに食物連鎖から完全には外れていなかっただろうし。で、するとどうだったかと言うと、その時代には所謂「天寿を全うする人」が極めて少なかったと考えられるのよ。

咲：

なんで？

徹：

うん、これは現代を生きている猿の群れを見ても分かるけど、老いたり傷付いたりして群れの移動についていけない者は、あっさりと

置いて行かれるんだよ。動けない者は仲間でも家族でも切り捨てちゃう。それだけ余裕が無いし、自分が生きるってこと自体に必死なんだろうね。だから、狩猟採集生活をしている限り、寿命で死ぬ人はまず居なかっただろうって事。

咲：
なるほど。

直：
それに切り捨てられた者は囷の役割も果たすから、その犠牲は群れの安全にも貢献した事だろうね。で、そんな生活だから、身の回りに仲間の死体が残る事はまず無かったと思う。
狩猟採集生活って気ままに感じるけど、実は命懸けの毎日だったんだよ。

それでね、普通に考えて純粹に生きるか死ぬかの世界に、神様なんか現れないだろ？

鉄：
そうか？綱渡りだからこそ神頼みするんじゃないの？

直：
そうだけど、それは神様が既に居る場合だろ？

まだ神様の居ない段階なら、神様を思う事はないだろう。いや必要性が無いし、信仰心なんか生まれる筈が無いのかも知れないよ。仮に居たとしても、祈る暇があったら食料を探せ、って感じじゃない？

鉄：
あゝ、そうか…。

直：
と、俺は思うの。ま、既に言葉が生まれていたら、もしかしたら神様信仰位はあったかも知れないけど、それでも発達したのはこの時代じゃない筈だよ。
そうは思わない？

鉄：
ごもつとも。

直：

やがて人類は革命的な発明をします。さて何でしょう。

徹：

『農業』。

直：

正解です。

そこで農業の発明は、人類に初めて正しい意味での『定住』をもたらします。

咲：

移動しなくて良いから？

直：

そうです。

定住は集落を作り、やがて村になり国家となります。あ、因みに狩猟採集生活から農業までには恐ろしい時間が掛かっていますが省きます。それから先程も出てきた『言葉』がどこかのタイミングで出ていた筈ですが、言葉は化石にもなりませんし、時期は正確には分かりません。分かりませんが、定住生活を始める頃には言葉位は使っただろう事は想像できます。なぜなら複雑な農業をこなす為には、言葉でのコミュニケーションは不可欠では無かったかと思えるからです。

咲：

ねえ、何でいきなりプレゼン口調なの？

直：

気分！そつととして。てか続けて良い？

咲：

良いけど…気持ち悪い。

直：

気持ち悪い、言うな。

続けます。さて、農業の発明により定住生活が始まり集落、つまり人里が誕生すると、人類は食物連鎖の輪から徐々に外れる事になり

ます。そして怪我した者や病気の者、老いた者も死ぬまで近くに居るようになります。死んでも死体は消えてくれませんか、その処理に困ります。それで埋葬の風習が出来たのだらうと思われれます。

鉄：

ホント気持ち悪いくな。

お前、いつも会社でそんな感じ？

直：

月一の報告会とか、客行つて説明する時はね。

普段はグニャグニャだよ。

鉄：

じゃあ、グニャグニャでやれよ。

直：

良いじゃねーか、今いいところなの。ほっとけ。

えーっと、何の話だっけ…。

あ、少し話が戻ります。

農業の発明から定住生活に入り、つまり食料の安定調達が出来るところになって、移動の必要も無い、となれば当然ですが暇が出来ます。つまり、生きる事自体に必死になる事も無くなり、生活にも時間にもゆとりが生まれる訳です。

この状況でいよいよ本格的に神様が登場出来るようになります。

咲：

考える時間が出来たから？

直：

それもあります、コミュニケーションが濃密になるから、ですね。語り合う時間が増えると話題は次々湧いて出てきます。神様については前にも話したのでここでは省くと思いますが、色々な疑問に対して、科学を用いず納得の行く結論を出す為には神様が最も合理的です。

咲：

はあ…。

直：

前に、神様や宗教は便利屋で道德の教科書と言いました。

鉄：

はい、聞きました。

直：

その話をもう一度。

鉄：

ど、どうぞ。

てか、もう頼むからその口調やめて。

直：

そんなに嫌か？

あゝ、神様が登場して、原始宗教が発達する。宗教が必要な理由は現代にも通じるけど、当時の方が圧倒的に必要性が高かった。

咲：

口調戻した…

直：

やまかすいゝ。

続けんぞ。人間は自分がいつか必ず死ぬ事を承知して生きている。だから身勝手に生きたい輩はいつの時代でも必ず居る。人権なんて言われ始めたのはつい最近の話で、それまでは酷い世界だったろ？大昔だつて同じだよ。定住して集落が出来る、逆にその住人には逃げ場がなくなる。力の強い者は当然支配階級に立ち上がり、力の無い者は支配されるしか生きる術が無くなる。鉄は人の本能を、食う・寝る・やる、と言つたが、俺がその時代の集落のボスになれば、確実にハーレムを作るね。

徹：

そうか…。国家も法律も警察も無い時代、宗教だけが人間の暴走を防げた訳か。

直：

と思うね。天国・地獄思想とか、閻魔大王みたいな死後の審判なん

てのも含めて、宗教最大の効果というか存在価値は、犯罪抑止力以外の何者でも無いよね。

あとは集落単位で所謂『掟』なんてのを作ったりして力の均衡を保ったんだろうな。

ああ、また話が脱線しちゃった。もとに戻すよ。

徹：

どうぞ。

直：

神様登場から原始宗教の誕生前後ね。

人類は知識を言葉で伝承する特技を持つてるから、知識は時代を重ねつつ増えていく。同時に神話だけじゃ説明しきれない疑問も湧いてきて、その一つには必ず「例の疑問」があつた筈だ。『人は死んだらどうなるのか…』がね。

徹：

そうだな。

直：

その答えだけど、多分、村や民族の単位で色々あつた。要するに考えた人のセンス次第だね。その考えを受け入れ易い環境だったかどうかにも依るけど、新たな疑問や矛盾に対し、修正されたり、他の考えと置き換えられたりして徐々に進化したんだと思う。

咲：

やっぱり人間なんだ。

直：

そうだよ。

これは全部想像で証拠は無いけど、そう考えると宗教が沢山ある事に矛盾しないだろ。しかも宗教は進化し続けている。古代から現代に掛けて、色々な地域や宗教で採用されてきた『死生観』は、色々あつて面白い。俺も詳しい事は知らないけど、死んだらお終いから、輪廻転生、輪廻プラス天国・地獄、死後世界への移住、とかね。

咲：

いっぱいあつたんだ：

直：

そう、その中からもっともらしい物が選択されて、いや不自然な物、都合の悪い物が淘汰されて現在に至ってる。それが実体だと思う。

さて、じゃあ、いよいよ霊の話にしよう。世界中の話は知らないし、現在の日本的な考え方が出来るまでについてで行こう。どう？

徹：

ああ、任せる。

小さな討論会7

直：

じやあ、霊の話を。

昔の人達は、人が死んだらどうなるかと考えた。死後も自分を失いたくないと望むのは俺にもわかる。そこで考え出されたのが魂だ。人が死ぬと肉体は滅びるが、魂は滅びず、そこには自我が残る、つまり自分の意識は死後も残ると考えた。この考えは多くの宗教でも採用されて、犯罪抑止力に貢献している事はさつきも言った通りだ。だが、この考えを推し進めるとある矛盾に辿り着く。

この世では人は赤ん坊として生れてくる。生れるばかりなら地球は人で埋まってしまいが、老いた者から順に死んで片付いていくからそうはならない。ま、実際には増えてるけどね。

でも、死後の魂が行く世界はどんな人口いや魂口か？霊口か？とにかく人数が増えるばかりになっちゃう。人、いや魂がひしめき合っていて何が天国か、何が楽園かと思うし、リアルにスペースが有限だったら居場所が無くなる心配も出てくる。

徹：

だから輪廻転生か？

直：

そう。

勿論、これが全てとは思ってない。もう一つ、人の欲望が絡んでいると思う。

徹：

欲望ね。

直：

うん。

人間は皆、誰かと自分を比較して生きている。これは群れで生活していた名残かも知れないけど、他人と自分を比較すれば、必ず誰か

を羨み、誰かを蔑む事になる。自分が頂点と思える人は極めて少数の、しかも少しおバカな人に限られるから、他は皆、幸せになりたい、幸せに生きたい、と願うはずだ。しかし人生と言うチャンスも一度しかないから、『次がある』という考えには誰もが惹かれたことだろう。その意味でも、人は来世を求めたと思える。

徹：

なるほどね。直の言う、都合の良い話を人が受け入れたって事な。

それで？

直：

次は幽霊だけど…

徹：

だけど？

直：

幽霊の出現する時間帯は概ね夜だよな？

鉄：

昼でも薄暗い場所とかな。

直：

ああ。

哺乳類は元々夜行性だった。しかし人間へ続く祖先はそれを改めた。昼間活動する生物は基本的に闇に夜を恐れる。神様を作り出した人類が次に作ったのは、魔物じゃなかったかと俺は思う。

徹：

魔物ねえ…

直：

そう、魔物。始めは昼の神、夜の神、そんな感じだったかもしれない。

前も話に出たけど、太陽崇拜は世界各地にあった。太陽は万物の恵みの象徴であり、これを悪者に仕立てた例は聴いたことが無い。逆に、犯罪行為の多くが夜行われるよね？

だから無理やり昼と夜とを比較すれば、昼は健全で夜は不健全とな

るし、昼は安全で夜は危険となる。だろ？

鉄：

夜行性の直に言われても信憑性無いなあ。

徹：

夜行性はお前だろ。

でも、直の言ってる事は分かるな。

直：

誰が夜行性かは置いていて。

特に、女性や子供にとっては夜の外出は危険だった。だから極力夜は外に出ない方が良く、出ようと考えなくなる様な寓話を求めた。それが魔物、ヴァンパイアとか、日本なら妖怪変化の類になったんじゃないかと思う。

徹：

うくん。素直に納得は出来ないけど、でも日本の妖怪には背景に教訓とか戒めとかが見え隠れしてるのも居るよな。

直：

そうだな。

それで、神様が誕生して魔物も生れると、ここからが人間の脳の面白いところだけど、幻覚が見間違えか、でっち上げか知らないが、『見た』という人が必ず現れる。

ネットシーは自分の悪戯だと告白した人が居たな？妖精写真もそうだった。その真否はともかく、首長竜が居る訳ないのは考えなくても分かる事。それでも目撃者は後を絶たなかった。科学の進んだ現代でもそうなんだから、古代なら当然のことだったろう。

徹：

うん、まあそうだろうな。

直：

そんな目撃談には、死んだはずの人の姿も現れる様になる。

鉄：

それが幽霊か。

直：
そう。

当時は科学も何も無い時代だ。『見た』と言う人が居れば、その人物を信じるかどうかが判定基準となる。信頼に値する人物の言葉なら、もう他の人は信じるしかない。

信じた場合、その死者の姿がそこにあった理由、理屈を作る必要が出てくる。

徹：
死後世界の在り方を変える必要も出てくる、か。

直：
うん。

例えば天国&輪廻転生を採用すれば、死んだ人は天国に行く筈なのに、現世に姿を見せる場合の追加が必要になる。そこで霊には二つのストーリーが追加される。

現れた死者が、幸せそうで穏やかな場合は、天国からの一時帰還とみなしてそれを可能にすること。

現れた死者が血まみれでおどろしい姿だった場合には、死後も天国に行かずこの世に留まる場合のあること。

この二つ、人間なら心情的に自然に受け入れられる。

自分の家族や子孫にメッセージを送るため、死後もここに帰って来たいと思うのは分かる。

殺されたりしてこの世に未練や怨みがあるなら、死んでも天国になんか行きたくない。その前に対象者に復讐を果たしたいと思うのも分かる。

そしてこの二つは道德の教科書たる宗教でも有用な考えだ。特に後者のケースは犯罪抑止力としても効果が期待できるしね。それに、おどろおどろしい方は、きつと魔の時間、恐怖の時間である夜とも強く結びついたんだと思う。

徹：
そうやって幽霊が生れたって事か。

直：

俺がそう思っつて話だけどね。

ホントはもっと単純だったかも知れない。

徹：

と言つと？

直：

ことわざとか、四字熟語とか、実際にあつた故事を基にしている場合が多いじゃん？

幽霊も同じかも知れない。例えばある村で、支配階級のAさんが、理不尽な理由で一般人Bさんを殺したとする。Aさんに逆らえる人は居ないからお咎めなし。しかし、そのAさんが突然不可解な死を遂げたとする。人々は噂する、死んだBさんの魂が復讐したんだとか、Bさんの祟りだ、とかね。

噂は噂を生み、それを裏付けるストーリーが考え出されて噂に追加される。

例えばこんな感じ。

咲：

その方が分かり易いかな。

今だって、事実を元に勝手に理由を想像して話すと、それが信実のように噂になつちやうつてあるもんね。

鉄：

そつだよな、俺もガキの頃に、変な噂流されて困つた事あつたよ。

咲：

どんな？

鉄：

言いたくない。

咲：

聞きた〜い！

直：

アイツは授業中に鼻くそ食つてゐるつて。

鉄：

言うなよ〜！

咲：

笑える〜。でも小学生なんてそんなもんだよねえ。

大丈夫だよ鉄、事実でも私は気にしないから。

鉄：

事実じゃねーよ、噂だつてば。

咲：

冗談だよ、信じてないから。

私が言いたいののはさあ、例えば友達の子がお父さんと歩いてただけなのに、援交の噂になったりした事が実際あったの、高校生の頃。そんな感じでしょ？

直：

そつだな。人間てさ、目にしたり聞いたりした事象に対して、その理由や背景を理解したがる習性があるんだよ。だから分からない場合は勝手に想像して納得する場合も多い。

鼻くそは別だけど。

鉄：

うるせえ。ガキとは言え俺的にはかなり厳しい状況だったんだぞ。

直：

ゴメンゴメン。笑えない話だよな。

それで、話を戻すけど良いか？

徹：

鉄、機嫌直せよ？誰も信じちゃいないから。

直、進めてくれ。

鉄：

分かってるよ、本気で怒ってる訳じゃないし。

直、次行ってくれよ。

直：

了解です。

てか、もう殆んど大枠の流れ話したから、後は細かい話を行こうと思う。

小さな討論会⑧

直：

先ずは霊の種類から行こうか。

亡霊・幽霊・浮遊霊に地縛霊・守護霊・背後霊。良く聞くのはこんな感じか。

それから、霊は善悪に分けられてる。

良い方は守護霊と背後霊位で他は大体畏怖の対象だな。

咲：

そうね。

直：

ところで、例えば地縛霊とか浮遊霊とか、広く世間に認知されたのはいつか知ってる？

徹：

知らないなあ。仏教用語じゃないと思うし。

鉄：

知らん。

咲：

知らな〜い。

直：

俺も正しくは知らないけど、1970年代に連載されてた、「のだじろう」さんの漫画らしいぞ。

徹：

マジで？

直：

ああ。あの人は心靈番組にも良く出てたし、霊能者とかの知り合いも多いだろうから、言葉自体は彼の造語では無いだろうけど、要するに昔からメジャーだった訳じゃないって事だろ？

咲：

そうなるよね。

漫画だったんだ…

直：

そうなんだって。

そうすると、今現在の幽霊話とか説明と違って、実は非常に新しいと思うんだよ。

咲：

それが事実なら、せいぜい30年〜40年位って事？

徹：

そうなるな。

直：

俺が見た本も、時代は一致するから流行を受けて出たモンかもね。でも、その流布には本だけじゃなく、当然メディアが深く係わってる。だろ？

徹：

確かに…

直：

となると、それこそ売り言葉に買い言葉みたいに次々新説が出てきたんじゃないかって、俺には思えるんだよね。

鉄：

まあ、ありえるね。

徹：

そうだな、情報の伝達速度が今と昔じゃ比較にならない。マスコミが一瞬でも騒げば、あっと言う間に世に広まるからな。

直：

そう。

でも、逆におかしいと思う人の反論もあつと言う間に伝わる。

徹：

だな。

直：

すると、更に修正したり矛盾点を是正する為の新説が飛び出す。

更にそれに反論する人が現れて…

徹：

また訂正理論が登場する、か。

咲：

それ、イタチゴッコって言うんだっけ。

直：

その通り。

鉄：

でも、そんなの世論が受け入れんのか？

そんなやり取り見てりゃ興ざめだろうに。

直：

そうなんだけどね。

でも鉄、お前も何となく信じるスタンスでテレビ見てんだろ？そう

言ってたじゃん。

鉄：

ああ…そう言えば。

直：

まあ話を戻すけど、名詞として地縛霊とか浮遊霊とかが世間に知れ渡る前を考えたい。

霊に、言われている様な人に姿を見せたり、憑依したりって言う不思議現象色々を起こす能力が備わってるって説に対しては、当然反論や矛盾点の指摘が出てくる。

最初にも言ったけど、例えば未解決の殺人事件について、

「犯人に憑依して自首する、自殺させる」とか、「霊能力のある第三者に訴えて、犯人を警察に伝える」なんて事が出来るはずだと考える人が必ず現れる。

しかし、それじゃ困る人たちが居た。

咲：

霊能者？

直：

それは定かじゃないけど、まあそれに近い人達かな。

徹：

宗教家もか：

直：

そうは思いたくないだろうけど、居たろうね。

徹：

まあな。

商売だし：

直：

おお、徹とは思えない発言。

徹：

仕方ないさ、宗教だって信者が居るから成り立ってるのは事実だし。

直：

まあね。そんで、そんな人達にとっては、地縛霊だ浮遊霊だ霊道だなんて言葉は救世主になった。つまり霊が存在していてくれないと困る人達は、ある意味『新型』の霊のあり方に一斉に飛びついた事だろうと思う。

そしてまた苦しい新説が続々登場した。

ま、地縛霊なんて俺には苦し紛れにしか思えないけどね。

鉄：

フラフラされちゃ迷惑ってか？

直：

そうだろ。自由に動けるなら、殺人犯はみんな獄中で発狂するよ、いや死ぬな。

鉄：

言われれば確かに。もし誰かに俺が殺されたら絶対復讐するしな。

直：

だろ？

だから動けない条件が必要だったんだよ。

でもね、よく考えると更におかしい事もある。

咲：

何？

直：

人には守護霊がついてんだろ？じゃあ、そいつらは何してんだよ。

加害側の守護霊は見て見ぬ振りで、被害側の守護霊は泣き寝入りか？なら要らねーだろ、そんな奴。

咲：

でも、守護霊が完全に導いてる訳じゃないって聞いたよ？ある程度の影響力はあるらしいけど、基本はその人次第だって。

直：

知ってる。俺も聞いた事あるよ。でも、正にそれが苦し紛れの辻褃合わせだと思わない？

咲：

あ…

そうかあ。

直：

俺はそう思うよ。だって何でもありじゃん。てか、おかしいだろ？守護霊一つ取ってもさ。他の霊から攻撃されたり、憑依までされてほったらかしか？

殺人に拘るけど、俺が被害者の守護霊なら、復讐しないまでも霊能者とやらに訴えて出るぞ。

鉄：

だよな…

直：

今は無理やり順序だてて組み立てたけど、実際には違うだろうね。多分、今で言うセミナーとか勉強会とか座談会とか、そんな小さな世界で頭の良い嘘吐きがレスポンス良く吐いた嘘が広まったってのが実態だろうと思う。ま、そんなもんだろ。

徹：

なるほどな…

だけど、例えば現象に対してそれを説明するための理論付けをするのは、必ずしも間違った方法じゃないよな？

直：

まあそうだけど？

徹：

いやな、次々新説が登場して議論されるってのは、ある意味で科学に通じるところがあるかと思ってね…

直：

お前、本気で言ってるの？

徹：

うーん、俺も研究やってるけど、科学だって先ず現象ありきで理論は後付け、だろ？

直：

それは認めるよ、俺も技術屋だから言ってる事は分かる。

けど、霊の場合とは致命的な違いが『現象』の部分にあるだろうが。

徹：

まあ、そうだよな…

咲：

ねえ、分かんないんだけど？

徹：

ああ、要するに再現性の問題だよ。

咲：

再現性…

徹：

そう。霊の話は目撃談も体験談も沢山ある。それを説明するための理論もあるにはあるけど、肝心の現象、つまり幽霊がいつでも確実に現れてはくれない。だから現象そのものが証明出来ない以上、それを解説する理論に意味がないって事だよ。

鉄：

でもよお、いつでも誰でも体験できる訳じゃないって理論なんだから、良いんじゃないかねえか？

直：

そうだけど、それが辻褃合わせじゃなかったら、世の中に辻褃合わせって言葉が要らなくなるよ。

鉄：

そう…なのか？

直：

そうだと思うよ。

例えばだけど、昔は死の病つてのが沢山あつたら？それを理解するために人々は崇りとか、魔物の仕業とか、そんな事で納得してたんだ。これが要するに辻褃合わせみたいなものだろ？

しかし病気には再現性がある。だから幽霊のそれとは次元が違うし、科学、この場合は医学だけど、それが進歩して病気の原因も突き止めたし対策も練り上げた。

科学は現象さえはつきりしていれば研究できる。心霊現象だって、たった一人の霊でも、たった一人の霊能者でも良い、確実に再現性のある者が居れば、証明も出来るし研究も出来るんだよ。ま、居ないけどね。

徹：

だな。前言は撤回する。科学とは程遠いな。

直：

まあ、こんなところじゃないの？

もう言う必要もないけど、鉄の言った通り、ぜんぶ人間の作った戯言だよ。

それが俺の結論です。

ところで咲、名古屋のホテルでみた『ソレ』は、確かに幽霊だったのか？

咲：

そう言われるとね、なんか自信がなくなってくるから不思議だよね…

直：

状況とか話してみる？

咲：

聞いてくれるの！

鉄：

何で嬉しそうなんだか…

咲：

だって聞いてくれないんだもん。

んとね、私の部屋は5階だったの、長い廊下の端の方だと思って。で、私が外出から戻って部屋に入ろうとしたら、廊下の向こうからコートをだらしなく着了た男の人がフラフラした足取りで、しかも何かブツブツ良いながら近づいて来たの。廊下も薄暗いし、表情とか良く見えないんだけど、とにかく気持ち悪い感じだった。

鉄：

酔っ払いじゃねえの？

咲：

私も一瞬そう思った。

でも、左手でなんか女の人のショールみたいな引きずってて、それとも不気味で。

徹：

そんで？

咲：

もう、私怖くて怖くてパニックっちゃって…

部屋に入りたいたいのにな、鍵が上手く入らなくて。ガチャガチャやってたら鍵落としちゃって、あゝもうヤバイと思いつながら、鍵を拾って相手の姿を確認したの。

鉄：

そしたら？

咲：

消えてた。

鉄：
おゝ鳥肌：
直：
ん？
咲：
おかしい？
直：
咲はどう思うの？
咲：
今思うと、でしょ？
直：
そうですね。
咲：
あはははは…
徹：
その人、エレベーターに乗ったんじゃない…
咲：
そんな気がして来た。
徹もあのホテル泊まったんでしょ？
徹：
ああ。あのホテルの廊下はエレベーターホールを中心に左右対称の作りだよな。
直：
ふうん。つまりその酔っ払い風の男は、自室から出てエレベーターに向かっていた。それを幽霊か変質者と考えて恐怖を覚えた咲が一人で慌てて、しかもタイミングよくその男がエレベーターホールに曲がった事で視界から消えたって事か？
咲：
分かんないけど、今思うとその可能性も否定できないなあ…なんて。あははは。

直：

良いじゃないの。

結局は自分が納得したらそれでOKだから。

咲：

私、靈感なんか無いのかも…

鉄：

また極端なやつぢゃなあ。

咲：

だって、さっきまでは幽霊だって確信があったの。他の可能性なんて考えもしなかったし…

でも改めて直に聞かれたら急に自信なくなっちゃった。今まで感じてたのも、ホントは違っのかなあ…なんて。

直：

ま、確かに誰かに言われて自信を失う様じゃ、体験そのものを実は信じてないのかもね。或いは記憶に曖昧な所があるとか。体験談とか目撃談って、全てとは言わないけど似た様なモンも多いんじゃないのかな。

徹：

そうかもな。俺が寺で感じた気配も確信がある訳じゃなし…

やっぱ無いのかなあ…霊なんて。

直：

やっぱ…？

小さな討論会9

鉄：

やっぱって、徹もホントは幽霊なんか信じてないって事？

咲：

・・・

直：

ありえるけど…

徹：

あ、いや忘れてくれ。「やっぱ」は口癖みたいなモンだから。ま、確かに自信喪失気味だけど。

それより『霊なんか無い』それが事実なら、霊能者は全部偽物で詐欺まがいつて事になるよな。じゃ世界中にやたらと詐欺師が居るって事？『直』流に言えばそれも十分に不自然だろ？

宗教はある意味学問だから同列で扱いたくないけど…

直：

でも、残念ながらそうなんだろうな。

悪意があるかどうかは知らんけど、適当な事言ってるのは確かだろ。半分お笑いの討論番組以外、霊能者が霊能者を批判してるのは見た事が無いし、たまにあっても、批判されてるのは素人が見ても偽物と分かるような輩だろ？って事は、各霊能者の思考はこうだと思う。「自分は霊を信じている。だがホントは自分に靈感なんか無い。しかし、本物の霊能者はいる筈で、でも自分には見分けられない。自分が偽物とばれるのは避けたい。攻撃されるとまずいから、自分も他人は攻撃しない。」ってな。中には霊なんか居る訳無いと思ってる奴も居るだろうけど、どっちにしても有名霊能者同士の批判合戦とか見た事が無い。

鉄：

ああ、確かに見ないね。

テレビで見るのは大体お笑いに近いし、直の言う通りだと思う。

徹：

それは分かるけど、でも…じゃあ、霊能者はみんな悪意の塊の詐欺師なのか？

直：

そうは言っていないよ。宗教と同じで必要悪って事もあるだろ？その霊能力とやらで法外な金品でも要求してりゃ詐欺だろうけど、善意でやってる人が居ないことも無いだろう。それに、俺に言わせりゃ病気だけど、ホントに見えたり聞こえたりする人が居るんだろうしね。

徹：

どういう意味で？

直：

精神疾患とまで言いたくないけど、本人の認識としては見えちゃう人、かな。つまり本人は至って本気だけど勘違いしてる様な場合、とか。言い方微妙になるよ…要するに悪意が無ければそれは詐欺じゃないって事。見える人には見えるって話だから。

徹：

ああ、そういう意味か。たとえ少し痛い人でも善意ならOKって事な。

直：

OKってか、残念ながら信じてる人が居て、それを説く人が居るなら需要と供給の関係だろ。詐欺師が相手じゃメチャクチャにされるから、だったら善意の人に相手して欲しいじゃん。俺には気持ち分らないけど、宗教にすぎる人と同じで何かにすがりたい人って多いし。

徹：

なるほどな。正しい指導者の言なら嘘も方便ってやつか。

直：

まあ、そんな感じだな。

お前にも悪いけど、宗教家にも責任があるぞ。

徹：

なんか言いたい事分かるよ…

咲：

え、何？

徹：

ただの葬儀屋だって言いたいんだろ？

直：

そーゆー事。

特に今の仏教は生き方と言うか、日常生活の指導が無さ過ぎる。説法の機会も減ってるんだろうけど、信者に対する日頃のケアが無いんだよ。だから怪しい新興宗教に惹かれちゃう人が多いんだと思う。勿論全部じゃないけどね。

徹：

だよな。今じゃ葬式と法事の時くらいしかお坊さんに会わないもんな。滅多に会わないお坊さんより、新興宗教の勧誘とか怪しい霊能者の方が魅力的って事か…

直：

うん…。日本人てポリシー無いじゃん？仏壇も神棚も何でも有りて。なんかこう、神秘的なモンとか何でも受け入れちゃう国民性があるよな。だから霊能者とかも受け入れ易いんだろうね。

徹：

そうだよな。キリスト教に輪廻の教義が無いなんて知りもしないで、前世が欧米人だって受け入れちゃうしな。要するに教育の問題とどうか、子供の頃から馴染みが無さ過ぎるんだな。

直：

逆にメディアは一方的に発信してくる。しかも中心は霊能者の方で、宗教関係は無し。

まあ、テレビで放送しても国会中継より視聴率取れないだろうな、説法じゃ。

徹：
はあ…。

直：

話、霊能者に戻すけど良いか？

鉄：

ああ。本物と偽物の話な。

直：

そう、さっき霊能者同士の批判合戦を見た事が無いって言ったけど、その続き。

鉄：

あいよ〜。

直：

脱力すんな…まあいいや。

もしもだけど、自分が本物の霊能力者で、他人が偽物と確信できて、且つそいつが間違った説でも展開してたら、鉄は黙ってられる？

鉄：

無理だね。そうでなくても霊能者って、なんか疑われてるじゃん。

俺なら黙ってられないね。

直：

そうだろ。それが自然だと思う。だったら今だって、偽物の廃除に動く奴が一人位は居るだろう普通。

鉄：

確かにそうだ。

みんな自分が偽物ってばれるのが怖いって事が、それとも組合でもあんのかな…

ま、ニセモンになんか偉そうな事言われたかねーな。

直：
だな。

前に霊能者の言っていることが結構バラバラだって言ったけど、他の世界じゃ有り得ない。

徹：
そうだな。科学界で新仮設が乱発される事があっても、議論は尽くされるし、皆証明するために実験や検証が繰り返されるもんな。

直：
そう。『言ってるだけ』なのは霊能者位だよ。宗教が沢山ある現状から、全部偽物と考えた方が合理的だと言ったけど、霊能者も同じだと思う。てか、もし俺が本物の霊能者なら、霊の存在を証明するために科学界に協力する。居ないよな？そんな霊能者。

徹：
居ないなあ…

でも…例えば霊が居る、それが真実だった場合、勿論霊能者にも本物が居る場合だけど、それで霊の存在を証明する方法があるのかなあ…？

直：
さあ。それは否定派の仕事じゃないし。

でも、名のある霊能者だって沢山死んでるんだから、誰か一人くらい公衆の面前に出て来りゃ良いんじゃない？一目瞭然たる。

徹：
極論はそうだけど…でもそんな事許されないのかも知れないし。

直：
「許されない」って誰にだよ。ちょっと宗教思想に毒されてない？ま、存在しない事は証明出来ないけど、存在も難しいだろ、証明は結局は再現性だよ、物理的な観測や測定が出来ない事になってんだから、霊とのコミュニケーションが公の場で何度でも取れない限り、証拠とは誰も認めないだろ。

徹：

・・・

直：

あ、そう言えば…

鉄：

何？

直：

心霊写真って、ある意味証拠みたいに言われてたよな？

咲：

そんな時期もあったね。

直：

デジカメが普及して減ったんじゃないの？

鉄：

無いわけじゃ無いだろうけど、デジカメだと心霊写真らしきものがすぐ作れるだろ？

信じて貰えないから発表されないとか。てか、作りモンが多すぎんじゃないの。

咲：

それに、すぐ消せちゃうし。

直：

なるほどね。でもおかしい話だな。

デジタルデータは逆に全ての情報が残るんだ。加工したかどうかなんてすぐ分かる。だから本物なら胸張ってデータで出せば良いだけなのに。むしろフィルム時代より証拠っぽくなるんじゃない？

鉄：

そう言えばそうか。

直：

実際、変なの撮れなくなってるんだと思うよ。

咲：

そう言われると、写メでもあんまり聞かなくなっただけ…

直：

心霊写真にもブームがあつてね。

咲：

ホント？

直：

うん。

これも詳しくは知らないけど、始めは一般にカメラが普及した頃で、次はインスタントカメラが大流行した頃だつてよ。

鉄：

何で？単に写真の数が多いって事？

直：

当然それもあるだろうけど、正しくは素人特有のミスが増えたかららしいよ。要するに素人が正しい知識無しにカメラを使う頻度が増えたから、心霊写真も増えたつて事みたい。

良くある二重露光とかの失敗写真はプロならず見抜けるらしいけど、素人はそれが心霊写真に見えちゃうし、その上そいつを鑑定して本物だつてぬかすニセ霊能者が居たから流行つたんだろうね。そういう使い捨てカメラ持つてる人減つたな…

鉄：

心霊写真は俺もなんか胡散臭いと思つてたけどね。

咲：

でも怖いのがあつたじゃん、いっぱい。

鉄：

そうだけどさ、オーブなんてホコリとそんなものの反射だろ？二重露光とかだつて酷いのがあつたぜ。

直：

その二重露光とかがデジカメじゃ起らないから取れないんだよ。ポラロイドが一番写り易かつたのも、構造的な理由があつたみたいだしね。

鉄：

分かる気がする。その場で写真にしてるって事は、その場で化学反

応バリバリさせてるって事だもんな。

咲：

鉄の口から化学反応…

鉄：

うるさいよ。

ん？徹、静かだな、どした？

徹：

凹んでんだよ。直の『宗教思想に毒されて…』は効いた…

直：

らしくねーな。別に嫌味で言った訳じゃねーぞ？

徹：

そいつは分かってるけど…

小さな討論会10

徹：

なあ直：

直：

ほんとに幽霊は居ないのかなあ…魂なんかも無いのかなあ…。

直：

無いな。

徹：

お前はホントにハッキリしてるよな。

何でそんなに断言出来るんだ。その自信は何処から来る？

直：

別に自信なんか無いさ。

最初に言ったっけ？俺は見たことも聞いた事も無いんだよ。だから理屈無しで信じることは出来ない。俺が信じる為には、その話が理にかなってる必要があるんだ。逆に言えば理に適ってさえいれば信じる事が出来るんだけどね…

徹：

理に適ってりゃ信じるのか？

直：

信じるさ。

徹：

例えば？

直：

俺は地球が自転してるなんて感じたことない。でもあらゆる観測事実が地球の自転を示しているし、宇宙の膨張も、相対性理論でもそうだ。データが捏造されてたらそれまでかもしれないけど、少なくとも『言ってるだけ』の霊能者の弁よりは確実に信用できるから。

徹：

なるほどね…

それに比べたら、幽霊話は酷いもんだよなあ。

直：

ああ。科学で説明できないとしながら正体は何らかのエネルギー体だと言う。エネルギーは科学用語だし、何らかのエネルギーなら観測できる筈だろ？てか、観測できないエネルギーって、その辺のゼンスが素晴らしいと思うよ。

天国だって何処にあるのかなんて示されてなかった筈。でも科学の進んだ現代では、どうやら宇宙にあるらしい。逆に地下にありそうだった地獄についちや、最近存在感さえ希薄になってる。何処にあるのか示し難いからだろ。

霊は壁でも人でも何もかもすり抜ける。それなのに物を動かしたりラップ音立てたりと、バツチリ物質に干渉出来る。器用なもんだ。

写真にもビデオにも写りこめて、天国にも行かずに彷徨ってるくせに、呼んだ時には出て来ない。

見える人にだけ姿を見せて、死んだ事情まで話すぐせに名前は名乗らない。

守護霊は守護してくれないし、犯罪を止めてもくれない。被害者になっても復讐は果たさず通りがかりの人間に八つ当たりしてるらしい。

悪人は地獄行きじゃないの？善人の魂中心で転生を繰り返してるなら、世界は平和になるだろ、そろそろ。

ぜくんぶ、無茶苦茶だと思わない？

徹：

まあ確かにお前の言う通りだ。それは分かったよ。

次だ次。ちよつと視点を変えるけど、お前は人類が本能で作った幽霊という偶像を放棄してないだけだと言った。神や妖怪は放棄されつつあるのにな。じゃあ幽霊はいつ放棄される？

直：

未来像か…

徹：

そうなるな。

お前の理屈が正しければ、幽霊もいつか否定されるだろ？

直：

そう思うけど、まだしばらく無理だろうな。

例えばあの江さんだよ。さっきはあえて言わなかったけど、彼はツインソールとか言う説明で、魂が割れると言ってる。つまり同じ魂起源で、同じ前世を持つ人間がいるって訳だ。その他にも色々説明してるみたいだけど詳しくは知らん。

ただその『ツインソール』って話は、さっき俺が展開した人口増加の矛盾、65000倍の話については辻褃合わせにや十分使える理屈だ。でも吟味すりゃまた矛盾が出てくる。結局前から言ってる様に『ああ言えばこう言う』だよ。それを延々と続けてるのが心霊話の実体だし、恐らくこれからもずっとそうだろう。

俺に言わせりゃ「一々真に受けてたらきりがない」んだけど、でも当分続くだろうね。

徹：

それも分かかってるつもりよ。問題はその先、当分続いた後は？何がどうなったら放棄されるんだ？

直：

その先ね…

多分だけど、人類が生命を作りだしたら終わるんじゃないの？

咲：

生命って、生命？生き物を作るって事？

直：

勿論そう。原始的な生命で十分だから、自己保存と自己複製を行う生命体をね。

鉄：

なるほど、実験室で生命体が合成できりゃ、神様も魂もいらなくなるって事な。

直：

その通り。俺思っただけど、実は不思議なのは幽霊でも魂でもなく、生命そのものだよ。

人類の科学は進化や退化の仕組みだって100%把握できてないし、無機物から有機物を合成するところまでは出来ても、その先はダメ。どんな単純な生命体も作り出せてない。

それも踏まえて生命の不思議なら100%認めるよ。

咲：

バイオテクノロジーでも無理なの？

直：

そいつは遺伝子組み換えが中心だよ。要するに改造であって、オリジナルの生命を作る訳じゃないし。

徹：

それさえ出来りゃ、人は神の仕事が出来る事になる…か。

直：

そう言うって良いかは分からんけどね。でも人工的に生物が作り出せるなら、神様は要らんだろ？それに人工的な生命に宿る魂って、イメージし難くない？

咲：

ねえ、生命作るってそんなに難しいの？

直：

難しいさ。だから奇跡なんだよ生命は。

徹：

おゝ直らしくない発言、『奇跡』とは。

あ、さっきのお返しな。

直：

はいはい。

咲：

生命の定義って自己…なんだっけ？

直：

『自己保存』と『自己複製』だろ？

保存とは自分が生きる為に努力する事、つまり餌を食つのも危険から逃げるのもそう。

複製は子孫を残す事、単細胞生命なら分裂がそうだ。

咲：

それを作り出せないんだね…科学って。

直：

うーん。咲、かなり分かってないよね？

咲：

あははは。

だってバイオテクノロジーとかクローンとか、ニュースでしか見えないけど、新しい生物作っちゃうんだと思ってたから…さっきまで。

徹：

簡単どころか恐ろしく難しいんだよ。だって直が『奇跡』って言う程だから。

直：

徹、そんなに気に入った？

でも『奇跡』なんだよ、生命は。

鉄：

でもよお、成分とか全部分析できてんだろ？なんで作れないの？

直：

『奇跡』だから。

鉄：

ホント、らしくねーな。分かるように言えよ。

直：

説明が難しいってか、俺だって詳しくも正しくも知らないから。

ただ、鉄お得意の化学反応な。

鉄：

お得意じゃねーし。

直：

最も身近な化学反応は「燃える」って事だろ？

鉄：

だから？

直：

燃えるモンの中心は有機物。石油でも石炭でも天然ガスでも、生命由来って事は知ってるよな？

鉄：

ああ。

直：

で地球温暖化の原因といわれるのは二酸化炭素。これは有機物の燃えカスだろ？

鉄：

そうだよ。

直：

人類の科学は、それさえ元に戻せないんだぜ？

鉄：

そうなのか？

直：

そうだろ、出来てりゃ地球温暖化が問題になるかよ。

鉄：

ああ…

徹：

二酸化炭素は植物以外に減らす手立て無しか。

直：

いや、技術的には出来るだろうけど、でも例えば1個の二酸化炭素を処理するのに何倍もの二酸化炭素が出るようなエネルギーが必要なんだから、多分。

徹：

ありえるな。それじゃ意味無いし。

直：

その位、有機物を人工合成するのは難しいって事だろ。

考えりゃ分かるだろうけど、燃えるゴミに分類されるものって、生物由来か石油製品だろ？100%人工合成ってまず無い。

そのレベルで、遺伝子ほど複雑な化合物は無理なんじゃない？正しくは知らないけど。

鉄：

なるほどね、無理なのは分かったよ。

そんじゃ、幽霊話はまだまだ当分楽しめるんだな。

直：

そうなるだろうな。江さんみたいな本物っぽい人も次々出てくるだろうし。俺は今でもそうだけど、エンターテイメントとして見りゃ、良いんじゃない？

徹：

エンターテイメントか…

鉄：

なあ、さっき直の言った『ツインソール』だけ…。人口増加に矛盾しないってヤツ。

直：

うん、なに？

鉄：

その説が正しけりゃ、かなり良いんじゃないか？

直：

まあ…

徹：

でもそれじゃ、魂の意味が無いって言いたいんだろ？

直：

分かっているねえ…

鉄：

分かんねえ…

直：

何て言ったら良いかなあ…。魂が割れるって事は、増えるって事だろ？

鉄：

勿論そうだよ。

直：

うん。地球生命もそうだったと言われてるよね？今、この地球上にいる生命の全ての祖先は、たった一つのDNAに帰依するって。どのレベル、どのステージにいる生命から魂が宿るのかは知らんけど、仮に全ての生命に魂が宿るとしたら、それって生命と同じ歴史になるよな？

鉄：

つまり最初に生れた生命と一緒に魂も生れたって事？

直：

そう…、それじゃ何で輪廻するんだ？と思わない？

鉄：

え？良く分かんねえな…

直：

だって、生物と魂と一緒に生れるんだよ？

ならどんどん生れりゃ良いじゃん。輪廻する必要が無いだろ。

鉄：

いや、意味が違うだろ？

最初の生命と一緒に生まれたとして、それは魂としても最初のレベルじゃん。そいつが輪廻して生命も進化するとか考えられねーのか？

徹：

生物の進化も魂の進化と共にあるって？

鉄：

そうだよ、それで同種の生物が増える時、魂も分裂して増えるとか。ダメか？

直：

良いなあ、それ。

お前、霊能者に向いてんじゃねえか？

鉄：

茶化すなって。

で、どうなんだよ。

直：

だから良いつて、その説。かなりの矛盾が解消できるよ。

鉄：

でもお前、全くそう思ってねーだろ。

直：

まあな…

鉄：

何処がおかしい？

直：

うーん、それが俺の言う新説誕生そのものだと思っからね。辻褄合わせも正にこうやって進んできたんだろ。鉄がちょっと名のある霊能者で、これがテレビで放送されてたら、来週から定説のように方々の霊能者が言いだすよ、きつと。

鉄：

そーゆー事か…

直：

昔ながらの説じゃ、魂が輪廻転生を繰り返すのは、修行だなんて言われてるだろ。それが割れるんだぞ？別人に生まれて全く違う境遇を生きるんだ。勿論死ぬタイミングも違っただろっし、あの世でまた合体するって話なら面白過ぎる。

そりゃ良いけど、修行は何処行っただ？

前世の一つがクレオパトラでしたって人が30人位いるの？

ま、それも違う理屈で取り繕えるだろうけどね。まったくきりが無いよ。

鉄：

そうだなあ…：そう言われると無理があるかあ。

理に適ってようが何だろうが、結局証拠が無けりや意味無しか。

直：

そうは言っていないけど、理に適うのと辻褃合わせるの是一緒じゃないからな。

咲：

江 さんて前世でも親子、前世でも夫婦とかつて話良くするよね？

それに先祖の霊が沢山後ろに居るとか、一緒に居るとか。

徹：

そうだな。

咲：

それなのに、前世がヨーロッパ人って話も多い。

直じゃないけど、よくよく考えると確かに違和感あるよね…

あの人も偽物で詐欺師？

直：

それは行き過ぎだろ。ま、もしあの人に鑑定なり霊視なりを頼んで一回50万円とかなら詐欺師扱いでOKだけど。でも良識の範囲内なら、あの人は詐欺師でも悪人でもないよ。テレビ見ても感じるけど、彼の発言は道徳的に正しいし、立派なもんだと思うからね。あのままで教祖になるなら、俺は絶対入信しないけど正しいお導きが期待できるんじゃないの？

徹：

教祖…：か。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4123c/>

幽霊がいるかって？そりゃ...

2010年12月14日17時41分発行